

「月ヶ瀬本仮名書き法華經」解説並びに翻字(二)

野 澤 勝 夫

はじめに

本稿は「仮名書き法華經」の新資料「月ヶ瀬本」を国語史資料として紹介、提供するものである。原本を、極力、原姿に近い形で翻字して示し、かつ仮名書き法華經の代表的な伝本である「妙一本」と対比してその異同を注記して添える。今回はその(二)として「方便品第二」「譬喻品第三」を対象とする。方便品は迹門の眼目と目され、四要品の一つとして重視されてきた。譬喻品は「三車火宅の譬え」——いわゆる「法華七喻の一つ」——を含み甚だ長大で、法華經(二十八品)全体の一割を占める。語彙・語法も多彩である。

翻字の方針は先の「凡例」に基づくが、「月ヶ瀬本」「妙一本」の両本の本文に相違が認められる場合にあつて、「月ヶ瀬本」の本文が「妙一本」の左傍の訓に一致するケースについては、下註に(左訓、同)と付け加えることにした。また、墨付きの頁はすべて対象とし頁数に含める方針であるが、一二五頁(巻二の「目次」の記載のみ)は今回、省略に付した。

全品の翻字作業を完了のち本資料全体にわたる解説を期しているが、以下には今回、翻字の対象にした範囲で特に目についた事項を摘記しておく。

「方便品」「譬喻品」略解説

(二)表記、用字について

月ヶ瀬本の表記(用字)には佛教要語の仮名書きや同音語の宛字があることは先にも指摘したが、本品にも次のような例が頻出する。

しよほう (五九・一)	しやりほつ (五五・七)
諸法 (五八・一)	しやり弗 (五六・八)
しゆ生 (二一・七)	舍利弗 (五七・四)
衆生 (二〇九・五)	

妙法蓮華經譬喻品第三

今時世命利弗のなぐーそんごうてま
 かりぬちちんを合せんげんをかんごうて
 佛小してゆけり、今をきふふあごひちりて
 い法けんごうをてんぬのなぐーとごうこそぞ
 うもなるるふんぬのゆへいんワ事むし
 佛いふがもをもてかりぬふんぬれはふた
 流るる夢漢あふるるふんぬとごうこそぞ

月ヶ瀬本仮名書き法華經(巻二の冒頭)

また、次の例は月ヶ瀬本が經文原典の本文から遊離して口唱用のテキストと独行し、經典の原文の理解に及んでいないことを示す。

- めう此を、あいするがごとし。 (月ヶ瀬本 一一三・五)
- ① 犛牛のおを愛するかことし。 (妙一本 一五一・五)
- 〔深著於五欲〕如犛牛愛尾 (岩波文庫本上 一二二・四)
- ひやく此ふうしき、しうけつし…… (月ヶ瀬本 一六二・五)
- ② 白牛の膚色充潔し…… (妙一本 二一八・五)
- 白牛膚色 充潔…… (岩波文庫本上 一六六・12)

(二) 音韻的な特徴

次のような「四つ仮名の乱れ」「開合のみだれ」が若干例、認められ、このテキストの書写成立の時期を推定する手掛かりを与えている。また、「教ゆる(九八・五)」などの動詞の八行の語尾がヤ行に変わる語が見られるのも中世語的である。

(1) 四つ仮名の乱れ

ぢうまん	〔充滿〕	(月ヶ瀬本 六三・五)
しゆぢやう	〔衆生〕	(月ヶ瀬本 一一七・1)
ぢぎいむげ	〔自在無礙〕	(月ヶ瀬本 一七三・3)
なんじ	〔汝〕	(月ヶ瀬本 七八・5)
だうしやう	〔道場〕	(月ヶ瀬本 一一一・1)
しやくす	〔着す〕	(月ヶ瀬本 二〇九・1)
しつじき	〔質直〕	(月ヶ瀬本 二一四・8)
みづ	〔見ず〕	(月ヶ瀬本 二二〇・6)
かづ	〔数〕	(月ヶ瀬本 六二・7 六三・8)

なお、「譬喩品」の長偈の初め(一八〇―一八一)にみられる鳥・虫・獸の類の難字語は、諸本では多少の異同を交えながら訓読されている

が、「月ヶ瀬本」では全て音読され、別筆で訓の書き込みが認められるなかに、なめくじら〔蛞蝓〕ねづみ〔鼠〕がある。

(2) 開合の乱れ

ぎもう	〔疑網〕	(月ヶ瀬本 六九・6)
こもう	〔虚妄〕	(月ヶ瀬本 九〇・3 九九・7)
しこうじて	〔而〕	(月ヶ瀬本 一七〇・3 一七一・3)
そうこ	〔糟糠〕	(月ヶ瀬本 九一・2)
ほうす	〔謗〕	(月ヶ瀬本 二一一・5)
ゑぞう	〔画像〕	(月ヶ瀬本 一〇六・6)

(3) 連声

深遠(じんのん 五七・6)の他、漢語と和語との融合した次のような例(いずれもN音で終わる漢語に格助詞ヲが下接するケース)が見られるが、中世後期(室町時代)の言語の反映が窺われる。

- ① かくのごときの法音の聞て、ぎげことくく、すでにのぞこりぬ。 (月ヶ瀬本 一三四・8)
- ② もろくのくなんのはなれぬ。 (月ヶ瀬本 一九〇・6)
- ③ なんのまぬかる事ゑしめん。 (月ヶ瀬本 一九一・6)
- ④ 舍利弗すら、なを、此経におゐて、しんのもて、いる事をゑたり。 (月ヶ瀬本 二〇三・8)
- ⑤ がけんのけするものには、この経をとくことなかれ。 (月ヶ瀬本 二〇四・4)

- ⑥ にくみそねみて、けつごんのいだかん。 (月ヶ瀬本 二〇五・6)
- (4) 濁音の表記

読経のためのテキストとして表音的な表記が目立つが、その一つに濁音の表記が多い。漢語に関しては、慣用の本濁・新濁に馴染まないものは読経の際の読み癖と思われるが、それらのなかに『日葡辞書』

(注1)

と一致するものがある(木村秀次氏の教示による)。

「くやう(供養)ず」Cuyōji zuru ita クヤウジ、ズル、シタ

「さんだん(讃嘆)」Sandān 「てんぽうりん(転法輪)」Tenbōrin

などは『日葡辞書』に見えるが、

「じゆぎ(授記)」Iugi 「げんぐ(堅固)」Qengo

「しつじ(嫉妬)」Xitto 「ふが(不可思議)」Fucaxigui

などは読み癖であるらしい。「月ヶ瀬本」が仮名書きの清濁の資料としてどの程度に有効であるか、今後、注意して見ていきたい。

(三) 語彙的な相違

(1) 別訓の対立

仮名書きの遺品を見比べると、同一語について音読・訓読の差異、対立は気付かれやすい特徴であるが、妙一本に見るように漢字の右傍に音読、左傍に訓(ときに語訳)を記すテキストがある。その何れを採るかによって同じ親本から音読・訓読の差異、対立をもつ転写本が生じうるから、音読・訓読の違いは直ちに訓読の系統の違いを示すことにはならない。しかし、別訓の対立は事情を異にする。すなわち、訓読文をつくるに際して和語の選択にはじまる。したがって別訓は字訓の資料であるとともに、訓読の系統を識別する確かな手掛かりたり得る。

方便品に頻出する「欲」の訓は①のように別訓が対立する。さらに敬語意識が加わって(1)～(4)のようなバリエーションを示す。

- ①欲
- | | |
|-----|---------------------------|
| ほつす | (月ヶ瀬本 六八・四 七一・二 七五・二……) |
| おもふ | (妙一本 九三・二 九七・三 一〇二・六……) |
| ほつす | (月ヶ瀬本 八一・二 八一・四・五 八五・六) |
| おぼす | (妙一本 一一〇・六 一一一・二・五 一一六・五) |

(2) 月ヶ瀬本が敬語化したケース

おぼす (月ヶ瀬本 七二・八)

おもふ (妙一本 九九・二)

(3) 共に敬語化したケース

おぼす (月ヶ瀬本 五九・四)

おぼす (妙一本 八〇・六)

(4) 共に敬語化し、月ヶ瀬本が「給ふ」を補読したケース

ほつしたまふ (月ヶ瀬本 八〇・八 一一〇・三)

おぼす (妙一本 一一〇・五 一四七・五)

②尽

ことごとく (月ヶ瀬本 五六・四)

③除

のぞこる (月ヶ瀬本 一三〇・二 一三四・八)

④除

のぞく (月ヶ瀬本 一四三・二 一九八・七 六一・四……)

⑤斜

かたぶき (月ヶ瀬本 一八〇・二)

⑥競

きそひ (月ヶ瀬本 二八一・五)

⑦唯

ただ (月ヶ瀬本 六七・八 七三・一 七四・四 七八・六)

⑧并

ならびに (月ヶ瀬本 一〇四・二 一一五・二 二〇三・四)

⑨軽

かるしめ (月ヶ瀬本 二〇五・五)

⑩極

しもつ (月ヶ瀬本 二〇七・一)

⑪久故 久しくふりて (月ヶ瀬本 一七九・8)
くちふりて (妙一本 二四一・6)

⑫仏子 仏のみこ (月ヶ瀬本 二一四・5 二一五・2)
ほさつ (妙一本 二八七・3 二八八・3)

⑬為 たり (月ヶ瀬本 一四六・7)
います (妙一本 一九七・6)

⑭為 たり (月ヶ瀬本 一七六・6)
まします (妙一本 二三七・3)

⑮而 しかも (月ヶ瀬本 一九一・5)
しかあるを (妙一本 二五六・5)

⑯但 ただ (月ヶ瀬本 一七〇・1 一七一・2 一七八・7)
たたし (妙一本 二二八・6 二三〇・2 二三九・3)

⑰乃 則 (月ヶ瀬本 二二四・2 二二四・4 二二五・1・5)
いまし (妙一本 二八六・5 二八七・2 二八七・3・6)

(四) 語法の変化

同一の經典が時代を隔てて、書写時の言語を反映しつつ書き継がれた仮名書き法華經は特に語法の変化、変遷を通時的に比較、観察するのに有利な国語史資料である。次には「コト得」の語法と謙讓の「給フ」について記す。

(1) 「コト得」の語法の消滅

古訓読の語法の一つとして、ウ(得)という語は可能を表す助動詞として用いるときには、上の活用語をコトで受けて「ヲ」とることなく直に接続するのが通則とされた。^(注2) 天理本、瑞光寺本、妙一本、足利本などの鎌倉時代の資料には完全に、または部分的に保存されていた「コト得」の語法が月ヶ瀬本ではすべて「コトヲ得」に変わっている。法華經には頻出する語法で用例が多い「翻字篇」にその都度、

下段に妙一本と対比して示した。

(2) 謙讓の「給フ」の消長

譬喩品の前半、舍利弗の領解(佛弟子の、佛説に対する理解内容の復唱)の部分には「妙一本」には謙讓の「給フ」(下二段)の使用例が多く認められ、以後の仮名書き法華經の遺品とは対照を示し、この語の消長を窺うのに恰好な資料たりえた。^(注3) 「月ヶ瀬本」ではそれらが無敬語表現に替っていることを「翻字篇」の当該箇所^(注3)に注記した。次には「奉る」が謙讓表現として代替している箇所(二例)をあげておく。

- ① 今、仏のおんきやうをき、奉るに、よろしきにしたがひて法をときたまひけり。
(月ヶ瀬本 一三三・2)
- ② 我ら、むかしより此かた、しばく世尊のせつ法を聞奉りしか共、
(月ヶ瀬本 一五〇・3)
- われら、むかしよりこのかた、しはしは、世尊の説法をききたまへしかとも
(妙一本 二〇三・2)

(五) 文脈、語順の異同

延べ書きの文脈・語順は最初の訓読に際して漢文原典を構文的にどのように理解したかによって決まり、転写の間にそれが変わることは考えにくい。したがって文脈・語順に異同は仮名書き資料の依拠する訓読の系統を識別する確かな手掛かりである。「月ヶ瀬本」と「妙一本」とが訓読の系統を異にするものであることは前稿にも述べた。

本稿(翻字篇)では文脈・語順に異同のある箇所を指摘し、【補注】に漢文原典を添えて示した。

以下には、漢文原典の訓読の仕方によって文脈・語順に異同の生じるパターン^(注4)の整理を試み、実例を添える。

① 単純なケースとして、文の区切り方によるもの。
 ② 右に準ずるが、經典中に幾度か現れる法華經の呼称を含む部分の訓方によるもの。

③ 目につきやすいものとしては倒置法の使用によるもの。

④ 他動詞の目的語相当部分の認定にかかわるもの。

⑤ 右に準ずるが、「有」の目的語相当部分の認定にかかわるもの。

⑥ 「以」の及ぶ部分の認定にかかわるもの。

⑦ 受身構文の訓法によるもの。

⑧ 二字漢字を熟語動詞と解するか、一字ずつの動詞と解するかによるもの。

句切りの異同

仏、くたいをとき玉ふ。じつにして、こと成にとなし。

(月ヶ瀬本 二〇〇・3)

① ほとけ、苦諦は真実にして、ことなることなしときたまふ。

(妙一本 二六八・1)

仏説苦諦 真実無異

(岩波文庫本上 二〇四・2)

法華經の呼称の訓み方

もろくのしやうもんのために、此大ぜうの經をとき玉ふ。妙法蓮華・けうぼさつ法・仏所ごねんとなづく。

(月ヶ瀬本 一三九・2)

② もろくのしやうもんのために、この大乘經の妙法華・教菩薩法・仏所護念となつくるをとく。

(妙一本 一八九・1)

為諸声聞 說是大乘經 名妙法蓮華 教菩薩法 仏所護念

(岩波文庫本上 一四四・13)

倒置法

われ記す、かくのごときの人、來世に仏道を成ぜん。

(月ヶ瀬本 九四・5)

③ われ、かくのごときのひと、來世に仏道をならんと記す。

(妙一本 一二七・5)

我記如是人 來世成仏道

(岩波文庫本上 一〇四・11)

我等、此事にあつからずして、はなはだ、みづから、如來のむりやうのちけんをうしなへることを、せんやうしき。

(月ヶ瀬本 一二七・1)

③ われらこの事にあつからずして、はなはた、みづから、感傷しき、如來の無量の知見をうしなへることを。

(妙一本 一七二・4)

我等不豫斯事 甚自感傷 失於如來 無量知見

(岩波文庫本上 一三四・6)

われ、さきに、「しよ仏世尊のしゆくゝのいんゑむ、ひゆ・ごんじきをもて、方便して、法をとき玉ふ。みな、あのくたら三みやく三ぼだひのため也」といわずや。

(月ヶ瀬本 一五三・2)

われ、さきにいわずや、「諸仏世尊の種々の因縁・譬喩の言辞をもて、方便して、法をときたまふは、みな阿耨多羅三藐三菩提のため也」と。

(妙一本 二〇六・6)

我先不言 諸仏世尊 以種種因縁 譬喩言辞 方便說法 為阿耨

多羅三藐三菩提。

(岩波文庫本上 一五八・9)

他動詞を含む句の訓方

道ちやうにして、くわをしやうずる事おゑて、われ、すでにことくくかくのごときの大くわほう、しゆの生さうのぎおちけんせり。

(月ヶ瀬本 六一・8)

道場にして、果を成すことえて、われ、すでにことくく知見せり。かくのごとき大果報、種種の性相の義をは……

(妙一本 八二・4)

道場得成果 我已悉知見 如是大果報 種種性相義……

(岩波文庫本上 七〇・17)

〔有〕を含む句の訓方

ほとけ子のころ、きよくにうなんに、又、りこんにして、むりやうのしよ佛のみもとに、しかも、じん妙の道行する有。

⑤ 佛子あり。ころきよく柔軟にして、また、利根なり。無量の諸

佛のみもとにして、深妙の道を行す。(妙一本 一二七・2・4)
有佛子心淨 柔軟亦利根 無量諸佛所 而行深妙道

(岩波文庫本上 一〇四・8・9)

〔以〕を含む句の訓方

深心に佛をねんじ、淨戒をじゆうぢするをもてのゆへに

⑥ 深心をもて、ほとけを念し、淨戒を修持するかゆへに

(月ヶ瀬本 九四・5)

以深心念佛 修持淨戒故

(妙一本 一二七・5)
(岩波文庫本上 一〇四・12)

〔受身構文の訓方〕

よろしき時にとく出して、火のためにせうがいせられしむること
なからしむべし。

⑦ よろしく時にとくいたりて、火の焼害する所たらしむる事なからしむべし。

(月ヶ瀬本 一五七・3)

宜時疾出 無令為火之所焼害

(妙一本 二二・2)
(岩波文庫本上 一六二・7)

〔二字動詞の訓み方〕

われ、佛眼をもて、くわんじて六道のしゆ生をみるに、びんぐうにしてふくゑなし。

⑧ われ、佛眼をもて、六道の衆生を觀見するに、貧窮にして福慧なし。

(月ヶ瀬本 一一三・2)

我以佛眼觀 見六道衆生 貧窮無福慧

(妙一本 一五一・2)
(岩波文庫本上 一二二・1)

なお、文脈・文体の差異は次のように「原典」の取意、理解の相違が表現に反映したものがあつた。「原典」の取意、理解の小異は補説に多く見られるが、これらは「翻字編」の下註に託した。

⑨ 此法花経をば、じんちのためにとく。せんしきは是〔を〕きいて、めいわくしてさとらず。

この法華経をは、深智のためにとけ。浅識はこれをききて、迷惑してさとらず。

斯法華経 為深智説 浅識聞之 迷惑不理

(月ヶ瀬本 二〇三・4)
(妙一本 二七二・1)
(岩波文庫本上 二〇六・13)

(注1) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店 一九八〇)

(注2) 春日政治『西大寺本金光明最勝王經古點の國語学的研究』(勉誠社・昭和

60)《研究篇二六七頁》

(註3) 拙稿「仮名書き法華経に見る謙讓の「給フ」の消長」(野沢勝夫『仮名書き法華経研究序説』(勉誠出版・二〇〇六)所収)

翻字篇

めにぢよたんして、ことくくして、あまり有事なからしめたまふへし。

妙法蓮華經方便品第二

その時に、世尊、三まいよりあんしやうとして立てしやりはつにつげたまわく、「諸佛のちゑはしんくゝにして、むりやうなり。其ちゑのもんは、なん

- (1) 諸佛の智慧、
(2) 甚深無量なり。
(3) 知恵の門、

げなんにう也。一さいのしやうもん、ひやくし佛のしる事、あたはざる所也。ゆへいかなとなれ共佛、むかし百千万おくむしゆの諸佛にしんごんして、ことくく諸佛のむりやうの道法を行じて、ゆみやうしやうじんして、みやうせう、あまねくきこへたまへり。じんくみぞうの法をしやうしゆうして、よろしきにしがひてとき玉ふ所、

- (1) ゆへはいかん。
(2) ほとけは、
(3) つくして
(4) きこへ、
(5) 成就して、
(6) さとりかたし。

ゆくゝのいんゑん、しゆくゝのひゆをもて、ひろくごんげうお(演べ)、むしゆのはうべんをもて、衆生をいん導して、もろくゝのぢやくをはなれしむ。ゆへいかなとなれば如来は、はうべん・ちけん・はらみつ、みなすでにくそくしたまへり。舍利弗、如来のちけんは、くわうだいじんのん也。むりやう・むげ・りき・むしよい・ぜんぢやう・げだつ・三まい有。ふかくむざいに入

- (1) ゆへはいかん。
(2) 如来の知見、
(3) 深遠なり(連声)
(4) 成就

まへり。舍利弗、如来はよくしゆくゝに分別して、たくみに諸法をとき、ごんじにうなんにして、しゆの心をあつかせしむ。舍利弗、要をとつてこれおいはゞ、むりやうむへんのみぞうの法をば、佛、ことくくしやうしゆうせり。やみなん、舍利弗、又、とくべからす。ゆへいかな。佛のしやうしゆうせる所は、たい一け有なんげの法也。たゞ、佛と佛とのみ

- (1) ときたまふ。
(2) 悦可す。
(3) 成就したまへり。
(4) ゆえはいかん。
(5) 成就したまへるころ、
(6) たたし

たまへり。いわゆるしよほうの如是相・如是性・如是たい・如是りき・如是さ・如はいん・如是ゑん・如是果・如是ほう・如是本末くきやうとう也。」その時に、世尊、かかねて此ぎをのべんとおほして、げおとひてのたまわく、

59 「せおふをば、はかるべからず。諸天、および世人、一さい衆生のたぐい、よく佛をしるものなし。佛の力・むしよい・げだつ・もろくの三まい、および佛の

- (1) 類、

しよの法をば、よくしきりやうするものおけん。もとむしゆの佛にしたがいたてまつりて、くそくして、もろくゝの道を行し玉ふ。じんくみめうの法おは、みかたく、さとるべき事かたし。むりやうをくこうにおみて、此もろくゝの道を行じおはりて、道ぢやうにして、くわをしやうずる事おゑて、われ、すでにことくくくくのごときの大くわほう、しゆ

- (1) なし。
(2) したがひて、
(3) 道を行したまへり。
(4) 法は、
(5) みることかたく、
(6) 無量億劫に、
(7) 果を成することゑて、
(8) 性相の義をは、

61 はうの佛、いまし、よく此の事おしり玉へり。此法はしめすべからず。ごんじのさう、じやくめつせり。しよの衆生るいは、よくとくげする事有る事なし。諸々の菩提しゆの、しん力げんご成ものおば、のぞく。しよ佛のでししゆ、むかししよ佛をくやうじ、一さいの漏すでにつくして、此さいごしんにちうせり。かくのごときしよら、そのちから、たゑざる

- (1) ほとけのみ、
(2) 万の菩薩の相違(津工)
(3) 諸余の衆生類、
(4) おく。
(5) 弟子衆の
(6) 最後身に住せる、
(7) ぞごこちちちのとも

62 くにして、おもひをつくして、ともに、たくりやうす共、佛のちゑをはかる事あたはじ。たとい、十方にみたらんもの、皆、舍利弗のごとく、および、よの諸々のでし、又、十はうの國にみたらむ、おもひをつくして、ともにたがりやうす共、又々、しる事あたはじ。ひやくし佛の、りちにして、むろのさいごしん成、又、十方かいにみち、其かづ、竹林のごとくならん、これら、共に一心におくむりやうこうにお

- (1) 舍利弗のごくならむ、
(2) 佛智、
(3) 舍利弗のごくならん、
(4) 度量、
(5) 十方界にみちて、
(6) かす四つ仮名の乱れ、
(7) ころをひとにして、

ゐて、佛のしつちをおもはんとほつ〔す〕とも、よく少ぶ
んをしる事なけん。しんほついの菩薩、むしゆの佛
をくやうじ、諸々のぎしゆをれうだつし、又、よく
法をとかむ、たう・ま・ちく・いのごとくにして、十方
せつにちうまんせん、一心にめうちをもて、ごうが
しやこうにおゐて、こと／＼く、皆共にしりやう
す共、佛智をしる事あたはじ。ふたいのもろ

63 〱のほさつ、其かづ、ごうしやのごとくして、一心

に共にしぐす共、又々、しる事あたはじ。又、舍利
弗につげたまはく、「むろふしぎのじん／＼み
めうの法をば、我、今、すでにつぶさにあたり。たゞ、
われ、此さうをしり。十方の佛も又、しか也。舍利弗、
まさにしるべし、諸佛のみこと、いなる事なし。

64 仏のしよせつの法に、まさに大しん力をしやうすべし。
世尊、法久しくして後に、かならずまさに、しん
じつをとくべし。もろ／＼のしやうもんしゆ、および

ゑんがくせうをもとむるもの、われは、くばくをたつ
せしめ、ねはんおたいとくせしめたるにつく。『佛の
はうべんのちからをもて、しめす、三せうのけう
をもつてせしことは、衆生、しよく／＼のぢやく、これを
ひいていたす事をゑしめんとなり。』その時に、大
しゆの中に、もろ／＼のしやうもん・ろじんの
あらかんたるあにやけうちん如とうの千二百人、

65 およびしやうもん・ひやくしぶつのこゝろをおこ

せる、びく・／＼にうばそく・うばいありて、おの／＼
此ねんをなさく、「いま、世尊、なんがゆへぞ、いんぎんに
はうべんせうたんして、此みことをなしたまふ。佛
のゑたる所の法は、じん／＼にして、げし方し。ご
んぜつしたもう所有は、いしゆしりがたし。一さいのし
しやうもん・ひやくしぶつのおよぶ事あたはざる

66 所也。佛、一げだつのぎをときしかば、我等、又、此法をゑ
て、ねはんにいられる。しかるに〔今〕此ぎのおもむく所

- (1) おもふとも、
- (2) よく少分をも
- (3) 菩薩の、
- (4) よく法をとく、
- (5) こと／＼として、
- (6) 充滿〔四つ仮名〕
- (7) 十方の刹に充滿せらむ
- (8) 一心をひきつして
- (9) 恒河沙劫に
- (10) 必ず四つ假名の乱れ
- (11) 恒沙のことく、

- (1) こころをひきつして
- (2) 無漏の思惟、甚深微妙の
- (3) たたし、
- (4) われのみ、
- (5) 諸佛は
- (6) ことなること
- (7) 法におきて、
- (8) なすへし、
- (9) 世尊は、
- (10) 法ひきしくありてのち
- (11) 真実をときたまへし、

- (1) われ、
- (2) われ、世尊をまめかしめ
- (3) 涅槃を證得するものに
- (4) はう、方便をもしやに
- (5) 三乗の教をもして、
- (6) 衆生の
- (7) これをひきいたす
- (8) ことしめたまふ。
- (9) 大衆のなかに、
- (10) 阿羅漢・

- (1) おもひをなさく、
- (2) ねんころに
- (3) 方便を
- (4) この言を
- (5) はのけのえたまへる
- (6) さとりかた、
- (7) ときたまひしかは、
- (8) われらも、
- (9) 涅槃にいたれり、
- (10) しかあるを、

をしらず。』其時に、舍利弗、四しゆの心のうたがひ
をしり、みづからも又、いまださとらずして、佛
に申てまうさく、「世尊、なんのいん、なんのゑん
有てが、いんぎんに、諸佛のだい一のはうべん、
じん／＼みめう、なんげの法をせうたんし玉ふ。
われ、むかしより此かた、いまだかつて、佛にした
がひ奉りて、かくのごときせつをきかず。』

67 今、四しゆ、こと／＼くみな、うたがひ有。たゞ

ねがわくは、世尊、此事をふゑんしたまふ。なんがゆ
へぞ、いんぎんにじん／＼みめう、なんげの法を
せうたんし玉ふ。』其時に、舍利弗、かさねて此
ぎおのべんとほつして、げおといて申さく、
「ゑ日大しやうそん、久しくして、いまし此法をと
き玉ふ。みづから『かくのごとき力・むい・三まい・
ぜんちやう・げだつとうのふかしぎの法をあたり。』
ととき玉ふ。道ちやうしよとくの法おほ、よく

68 問をおこすものなし。我心にはかるべき事

かたし。又、よく、とうものなし。とう事なけれ
ば、しかも、みづからとひて、しよ行の道をせうた
んす。ちゑ、はなはだみめうにして、諸佛のゑた
まへる所也。むろ／＼のらかん、およびねはん
をもとむるもの、今、みな、ぎもうにだしぬ。

69 佛、なんがゆへぞ、これをとき玉ふ。それ、ゑん
がくをもとむるもの、びく・びくに・しよてんりう・

きじん、およびけんだつばとう、あひみてゆよ
をいだいて、りやうそく尊をせんかうし奉る。』
此事、いかなりとかせん。ねがはくは、佛、ためにげせ
つし玉へ。諸／＼のしやうもんしゆにおゐて、佛、
われをだい一なりとき玉ふ。われ、今、みづか
ら智において、ぎわくして、さとする事あたは

70 ず。是、くきやうの法とやせん、これ、しよ行の道
とやせん。ぶつくししやうのみこ、かつしやう、せんか

- (1) ねんころに
- (2) 菩提心をまよひて
- (3) かくのごとき説
- (4) ききたまへす。
- (5) たたし

- (1) 敷演したまへ。
- (2) ねんころに
- (3) おもひて、
- (4) ひさしくありて
- (5) かくのごとき力
- (6) 法は、

- (1) わかころ、
- (2) ときて
- (3) 無漏の
- (4) 疑網開合の乱れ
- (5) その
- (6) もろもろの天龍

- (1) 瞻仰す。
- (2) たなころをあはせ

こうしてまち奉る。^①ねがはくは、みめうのみこゑを出して、時にために、じつのごとくきたまへ。諸天・りう神との^②其かづ、^③ごうじやのごとし。佛をもとむるもろくの菩薩、大しゆ八万有。又、もろくの万おくの國の、てんりんじやう王のいたれる、がつしやうして、^④きやう心をもて、ぐそく道をきかんとほつす。^⑤其時に、佛、舍利弗につけたま

71 わく、「やみなん、く。又、とくべからず。もし此

事をとかば、一さいのせけん、^①諸天、および人、みな、まさにおどろきうたがふべし。^②舍利弗、かさねて佛に申てまうさく、「世尊、たゞねがはくは、これをとき玉へ、く。^③ゆゑいかにとなれば、此ゑのむしゆ百千万おくあそぎの衆生は、むかし、諸佛をみ奉れり。^④しよこん、みやう利にして、ちゑ、みやうれう也。佛のしよせつを聞て、則、よくきやうしんせむ。^⑤」

72 其時に、舍利弗、かさねて此ぎをのべんとお

ほして、^①げおといて申さく、「法王、無上尊、たゞとき玉へ。ねがわくは、うら思ひ玉ふ事なかれ。此ゑのむりやうのしゆは、よくきやうしんすべきもののみあり。」佛、又、舍利弗をとめてたまはく、「若、此ことをとかば、一さい世けんの天人・あしゆら、皆、まさにぎやうすべし。^③ぞうじやうまんのびく、まさに大きやうにおちなんとす。」^④其時に

73 世尊、かさねてげおとひてのたまわく、

「やみなん、く、とくべからず。我が法は、妙にしておもひがたし。諸々のぞう上まん〔の〕もの、きひてかならずきやうしんせじ。」その時に、舍利弗、かさねて佛に申てまうさく、「世尊、たゞねがはくは、是をとき玉へ、く。今、此ゑの中のわれらこときのたぐひ、百千万おく成は、世々にすでに、むかし佛にしたがひ奉りて、化をうけたり。かくのご^⑦ときの人ら、かならずよくきやうしんせん。」^⑧長

(1) まつ。

(2) 諸天・龍神。

(3) かす四(仮名の乱れ)

(4) たなごころをあはせ

(5) きかんとおもへり

(1) 一切世間の

(2) 驚疑しぬへし。

(3) たたし

(4) 「繰返し」ナシ。

(5) ゆへはいかん。

(6) みたてまつり、

(7) 敬信しなん。

(1) おもひて、

(2) たたし

(3) 驚疑しぬへし。

(4) 大坑におつへし。

(1) たたし

(2) 「繰返し」ナシ。

(3) われらかごとき

(4) 百千万億なる、

(5) 「すでに」ナシ

(6) したかたてまりて

(7) かくのごときらの

(8) 敬信しん。

夜あんおんにして、ねうやくするところおほからん。^①其時に、舍利弗、かさねて此ぎをのべんとほつして、^②げおといてまうさく、「無上りやうそく尊、ねがわくは、だいいの法をとき玉へ。我、佛のちやうしたり。たゞ、ふんべつして、とく事をたれ玉へ。此ゑのむりやうのしゆは、よく此法をきやうしんせん。」^④佛、すでにむかし、世々に、かくのごときらをけうけし玉へり。皆、一心にがつしや

75 ごときらをけうけし玉へり。皆、一心にがつしや

うして、^①佛語、ちやうしゆせんとほつす。^③我等、千二百、およびの佛をもとむるもの、ねがわくは、此しゆのためのゆゑに、たゞ、ふんべつして、とく事をたれ玉へ。是らの法をきかば、則、大くわんぎをしやうぜん。^⑥其時に世尊、舍利弗につけたまはく、「なんぢ、すでに、いんきんに三たひしやうしつ。あにとがざる事をゑんや。なんぢ、今、まことにき

76 け。よくこれをしねんせよ。われ、まさになんぢ

がために分別して、げせつすべし。」^①此みことをとき玉ふとき、^②ゑ中にびく・く・に・うばそく・うばい、五千人とう有、^③即、ざよりたつて、佛をらいして、しりぞきぬ。ゆゑいかなとなれば、^⑤此ともがらは、さい根しん重に、^⑥およびぞう上まんにして、いまだ、ゑざるをゑたりとおもひ、いまだ、せうせざるをせうせりとおもへり。かくのごときのとが

77 有。こ、をもつてちうせず。世尊、もくねんと

して、せいしたまわす。其時に、佛、舍利弗につけたまわく、「我、今、此しゆは〔また〕しやうなし。^②もつはら、ちやうじつのみ有。舍利弗、かくのごとき^③のぞう上まんの人は、しりぞいても、又よし。なんぢ、今、よくきけ。まさに、なんじがためにとくべし。」舍利弗のまうさく、「たゞ、^⑥しかなり。世尊、ねがわくは、きかんとほつす。」^⑦佛、しやりはつにつけたまわく、「かくのごときの妙法は、諸佛

(1) おほかへ妙(本の神妙)

(2) おもひて、

(3) たたし、

(4) 敬信しなん。

(5) 「すでに」ナシ

(7) ころをひとにし、

(1) たなごころをあはせて

(2) 佛語を

(3) おもへり。

(4) たたし、

(5) これら、

(6) 大歡喜をなてん。

(7) ねんころに

(8) あきらかに

(1) この語

(2) 会のなかに

(3) 五千人等ありて、

(4) たちて

(5) ゆへはいかん。

(6) 罪根深重なり。

(7) かくのごとき

(1) 制止し

(2) 枝葉なくして、

(3) かくのごとき

(4) しりぞきぬる、

(5) 舍利弗、

(6) たたし

(7) おもふ。

(8) かくのごとき

如来の、時に、いましこれをときたまふ事、う
どんげの、時に一たびげんずるがごとくしまく
のみ。舍利弗、なんぢらまさにしんずべし。佛の
しよせつは、みこと、こまうならず。しやりほつ、
諸佛ずいきのせつ法は、いしゆ、げしがたし。ゆへ
いかんとなれば、われ、むしゆのはうべん、しゆゝの
いんえん・ひゆ・ごんじをもて、しよほうをえんぜ
ず。此ほうは、しりやう・ふんへつのよくげする

- (1) 如来、
- (2) ときたまふ。
- (3) とくありて、
- (4) こくまぐのみ
- (5) 〔語法に疑義〕
- (6) 〔諸佛の相違〕
- (7) 諸佛の、
- (8) さとりかた。
- (9) ゆへはいかん。
- (10) 演説す。

所にあらず。たゞ、しよ佛のみましゝて、いまし
い、よく、これをしりたまふ。ゆへいかんとなれ
ば、しよ佛、世尊は、一大事のいんえんをもての
故に、世にしゆつげんしたまふ。舍利弗、いか成をか、
しよ佛、せそんのたゞ、一大事のいんえんをもて
のゆへに、世にしゆつげんし玉ふとなづく。
しよ佛、せそんは、衆生をして佛ちけんをひ
しやうゝ成事をえしめんとほつした

- (1) たたし
- (2) いまし
- (3) しろしめせり。
- (4) ゆへはいかん。
- (5) 世尊は
- (6) たたし
- (7) ほとけの知見を
- (8) ひらかしめ、
- (9) 演説をえしめむと

まふがゆへに、世に出現したまふ。しゆじやうに佛ち
けんをしめさんとほつするがゆへに、世に出現し
玉ふ。衆生をして、佛ちけんをさとらしめんと
ほつするがゆへに、世に出現し玉ふ。衆生をし
て佛ちけん道にいらしめんとほつするがゆへ
に、世にしゆつげんしたまふ。舍利弗、これを、しよ
しよ佛は、たゞ、一大事のいんえんをもてのゆへに、世
にしゆつげんしたまふとす。佛、しやりほつにつ

- (1) おほすかゆえに、
- (2) ほとけの知見を
- (3) おほすかゆえに、
- (4) おほすかゆえに、
- (5) ほとけの知見の道
- (6) おほすかゆえに、
- (7) たたし、

げたまわく、「しよ佛如来は、たゞ、菩薩をけうけ
し玉ふに、もろゝのしよさあるは、常に一事
のためにす。たゞ、佛ちけんをもて、しゆじやうに
示悟す。しやりほつ、如来は只、一佛ぜうをもての
ゆえに、衆生のために法をとく玉ふ。よせう
の、もしは二、もしは三有事なし。舍利弗、一切
の十方のしよ佛の法も、又、かくのごとし。しやり
82 ほつ、くわこの諸佛も、むりやうむしゆの方便・

- (1) たたし、
- (2) 教化したまふ。
- (3) 一事のためなり。
- (4) たたし、
- (5) ほとけの知見を
- (6) 示悟せむとなり
- (7) たたし、
- (8) 一切十方の

しゆゝのいんえん・ひゆ・ごんじをもて、しかも、衆生
のために、しよ法をえんぜつし玉ふ。此法は、み
な、一ぶつぜうのためのゆへ也。此もろゝの衆生
の、しよ佛にしたがひ奉りて、法をき、しは、
くきやうして、皆、一さいしゆちをえつ。舍利
弗、みらいのしよ佛の、まさに世に出たまふ
べきも、又、むりやうむしゆのはうべん・しゆゝの
いんえん・ひゆ・ごんじをもて、しかも、しゆじやう

- (1) 「しかも」ナシ
- (2) この法も、
- (3) 上かふたてまつりて
- (4) 法をききしも、
- (5) 一切種智をえてき。
- (6) 「しかも」ナシ

のために、しよほうをえんぜつしたまふ。此法は、み
な、一ぶつぜうのためのゆえ也。此諸々のしゆじやうの、
佛にしたがひ奉りて、法をきかんと、くきやうし
て、みな、一さいしゆちをうべし。舍利弗、げんざい十
方のむりやう百千万おくの佛土の中にしよ佛
世尊、しゆじやうをにうやくし、あんらくし玉ふ所
おし。此諸佛も、又、むりやうむしゆのはうべん・し
ゆゝのいんえん・ひゆ・ごんじをもて、しかも、衆生

- (1) 演説したまはん。
- (2) この法も、
- (3) 上かふたてまつりて
- (4) 一切種智をえん。
- (5) 「しかも」ナシ

のために、しよ法をえんぜつし玉ふ。此法は、みな、
一佛ぜうのためのゆへ也。此もろゝの衆生の、佛に
したがひ奉りて、法をきくも、くきやうして、
みな、一さいしゆちをう。舍利弗、此しよ佛は、
たゞ、菩薩をけうけし玉ふ事、佛のちけん
をもて、しゆじやうにしめさんとほつし玉ふゆ
へ也。佛のちけんをもて、衆生にさとらしめん
85 とほつしたまふがゆへ也。舍利弗、われ、今

- (1) この法も、
 - (2) 上かふたてまつりて
 - (3) 菩薩を教化したまふ。
 - (4) おほすかゆへ、
 - (5) 「也」を見せ消して
- 「に」改め、行間
補記あり。【補注3】

又々、かくのごとし。もろゝの衆生のしゆゝ
のよく、じんじんしよやくあるを〔知りて〕その本
性にしがつて、しゆゝのいんえん・ひゆ・ごんじ・
はうべんのちからをもてのゆへに、しかも、ため
に、法をとく玉ふ。しやりほつ、かくのごとく成事
は、みな、一佛ぜう・一さいのしゆちをえしめんがため
のゆへ也。舍利弗、十方世界の中には、なを二ぜう
86 なし。いかにいはんや、三あらんや。舍利弗、しよ佛、

- (1) 深心の所着
- (2) あることを
- (3) 方便力〔左訓、同〕
- (4) 法をとく。
- (5) かくのときは、
- (6) 諸佛は、

五ぢよくあく世にいで出玉ふ。いわゆるごうぢよく・ほんのうぢよく・しゆしやうぢよく・けんぢよく・みやうぢよく也。かくのごとき、舍利弗、ごうぢよくのみだれたる時には、しゆ生のくおもく、けんどんしつどにして、諸々のふぜんごんしやうしゆうせるがゆへに、しよ佛、はうべんのちからをもて、一佛ぜうにおゐて、分別して三とき玉ふ。舍利弗、若、わがでし、みづからあらかん・ひやくし佛

- (1) 煩悩開合の乱れ
(2) 不善根を
(3) 方便力

なりとおもわんもの、しよ佛如来の、たゞし菩薩をげう「化」する事をきかず。しらざらんは、是、ぶつでしにあらず、あらかんにあらず、ひやくし佛にあらず。又、舍利弗、此もろくのびく・くに、みづから「すでにあらかんをえたり。これ、さいごしん也。くきやうねはんなり」とおもふて、則、又、あのかたら三みやく三ばだいをしぐせざ

- (1) おもへらむもの
(2) たた菩薩をのみ
(3) 教化したまふこと
(4) 最後身
(5) おもひて

ぞう上まんの人也。ゆへはいかんとなれば、若、びくのしつにあらかんをえたる有て、若、此法をしんぜずといはゞ、此所に有事なけん。佛のめつどの後、現前に佛なからんをばのぞく。ゆへいかんとなれば、佛のめつどの後には、かくのごときらの経をじゆぢし、どくじゆし、其きをさとるもの、此人は、あかたければなり。若、よの佛にあひ奉らば、此法の中におゐて、則、けつれうす

- (1) ゆへはいかん
(2) 実に
(3) 阿羅漢をえて
(4) 語順の相違「補注4」
(5) このことはり
(6) おく
(7) ゆへはいかん
(8) 滅度のちに
(9) 受持説誦し
(10) うることかたし
(11) 余のほとけにあひて
(12) この法のなかにして

る事をえん、舍利弗、なんぢら、まさに一心にしんげして、佛語をじゆぢすべし。しよ佛如来はみこと、こもうなし。よせう有事なし。たゞ、一佛ぜうのみ也。其時に、世尊、かさねこ此ぎをのべん「どほつし、げおといてのたまわく、
「びく、く、にの、そう上まんをいだける、うばそくのがまん成、うばいのふしんなる有、かくのごとき90の四しゆら、其かづ、五千有。みづから、そのとがお

- (1) 決することとてむ
(2) なんたち
(3) 虚妄開合の乱れ
(4) たたし
(5) おほして
(6) いたけることある
(7) 語順の相違「補注5」
(8) 四衆等
(9) かす四つ仮名の乱れ

みず、かいにおゐて、けつろ有て、其けしをこしやくす。此小智は、すでにいでぬ。しゆ中のそこう也。佛のいとくのゆへにさりぬ。此人は、ふくとくすくなくして、此法をうくるにたえず。このしゆに、しようなし。ただ、もろくのちやうじつのみ有。舍利弗、よくきけ。しよ佛のしよとくの法は、むりやうのはうべん力をもて、しかも、衆生のためにときた91まふ。衆生の心のしよねん、しゆくのしよ行の

- (1) 欠漏あり
(2) まほりおしむ
(3) 衆のなか
(4) 糟糠開合の乱れ
(5) この衆は「6」枝葉
(7) たたし
(8) 所得の法を、
(9) 「しかも」ナシ

道、そこばくのもろくのよく性、ぜんぜのぜんあくのごう、佛、ことくこれをしろしめしおはりて、もろくのえん・ひゆ・ごんじ・はうべんのちからをもて、一さいをして、くわんぎせしめたまふ。あるひはしゆたら・かだ、およひほんじ・本しやう・みそううをとき、又、いんえん・ひゆ、ならびに祇や、うはたひしや経をとき玉ふ。どんごんにして、小法をねがひ、92しやうじにどんぢやくし、もろくのむりやうの

- (1) 若干の
(2) 方便力
(3) あはせて
(4) 祇夜と

佛におゐて、じん妙道を行ぜずして、しゆくのうらんせらる、是がためにねはんをとき玉ふ。われ、此はうべんをもうけ、佛えに入事をえしむ。いまだかつて、なんぢら、まさに佛道をしやうずする事をうべしととかず。いまだかつてとかざるゆへは、せつ時、いまいたらざりしがゆへ也。今、まさしく、是、其時也。けつぢやうして、大せうをとく。我、此九ぶ93の法は、衆生にずいじゆむしてとく。大ぜうに入

- (1) 深妙の道
(2) 行の妙一お誤か
(3) 衆苦に
(4) 煩悩開合の乱れ
(5) 悩亂せらる
(6) 涅槃をとく
(7) まうけて
(8) いることえしむ
(9) なんたち
(10) 佛道をころへし
(11) いまだたまたまのや
(12) 衆生、

をほんとす。爰をもての故に、此経をとく。佛子のこ、ろ、きよくにうなんに、又、りこんにして、むりやうのしよ佛のみもとに、しかも、じん妙の道行する有。此もろくの佛子のために、此大ぜう経をとく。われ記す、かくのごときの人、来世に佛道を成ぜん。深心に佛をねんじ、淨戒をじゆぢするをもてのゆへに、これら、佛をえつときい94て、大きに「喜び」身にちうへんす。佛、かの心行をしる

- (1) 大衆に在るに本たり
(2) もてことさらに
(3) 「しかも」ナシ
(4) 語順の相違「補注6」
(5) 語順の相違「補注7」
(6) 佛道ならん
(7) 深心をもて
(8) 語順の相違「補注8」
(9) はとけをうへし
(10) 奮し四つ仮名の乱れ
(11) かれか心行

しめせり。かるがゆへに、ために大ぜうをとく。⁽¹⁾ しゃうもん、もしは菩薩、わがしよせつの法をきく事、ないし一げにおゐてもすれば、⁽²⁾ みなく成佛する事、⁽³⁾ うたがひなし。十方の佛土の中には、⁽⁴⁾ た、一ぜうの法のみあり。二つもなく、又三つもなし。⁽⁵⁾ 佛のはうべんのせつおはのぞく。⁽⁶⁾ たし、かのみやうじをもて、衆生をいん導す。⁽⁷⁾ 佛のちゑをと

95 かんがゆゑに、しよ佛は世に出たまふ。⁽⁸⁾ た、此一本

事のみまことなり。⁽¹⁾ よのふたつは、則、まことにあらず。⁽²⁾ つゝに小ぜうをもて、しゆじやうをさいとしたまわす。佛は、みづから大ぜうにちうし玉へり。其しよとくの法のごときんば、⁽³⁾ ちやうゑのちから、しやうごんせり。こ、をもて、しゆ生をどす。⁽⁴⁾ みづからむ上道大ぜうひやうどうの法をせうじながら、⁽⁵⁾ もし、小ぜうをもてげする事、⁽⁶⁾ ないし一人に

96 おゐてもせば、われ、則、けんどんにおちん。此事お

ば、⁽¹⁾ ふかなりとす。もし、人、佛にしんきすれば、如来、こわうしたまはず。又、としつゝの心なし。しよ法の中にあくを断たまへり。かるがゆへに、佛、⁽²⁾ 十方におゐて、しかも、⁽³⁾ ひとりおそる、所なし。われ、さうをもつて身をかざり、くわうみやう、世けんをてらす。むりやうのしゆに、たつといなし、⁽⁴⁾ ためにじつさうのゐんをとく。舍利弗、まさにしるべし、我

97 もと、せいぐわんをたて、一さいのしゆ(生)をして、

わがごとく、ひとしくして、異なる事ならしめんとほつき。⁽¹⁾ わがむかししよぐわんのごとき、⁽²⁾ いま、すでにまんぞくしぬ。一さいの衆生を化して、皆、佛道にいらしめつ。もし、われ、しゆじやうにあふて、⁽³⁾ とくくおしゆるに、⁽⁴⁾ 佛道をもてせば、むちの

ものは、しやくらんして、めいわくして、おしへをうけじ。われしりぬ、此衆生は、いまたかつて、ぜんぼんを

98 じゆせず。五よくにけんちやくして、ちあいのゆへに、

- (1) 大乘經ときたまふ。
- (2) 一偈にきてせんは、
- (3) みはとけになんは、
- (4) 十方佛土
- (5) たなし
- (6) 二なく、また、三なく、
- (7) 方便の説をおく
- (8) 引道したまふ。
- (9) よいいてたまふには
- (10) たなし

- (1) この一事のみ実なり。
- (2) 真にあらず。
- (左訓「まこと」)
- (3) 法のごときは、
- (4) 二をも、衆生をたす。
- (5) 法を證せり。
- (6) もし衆生をもて化すと
- (7) 墮しなし。

- (1) この事は、
- (2) ほとけは、
- (3) 「しかも」ナシ
- (4) 無量の衆、たとふところとして、

- (1) おもひき。
- (2) 所願のごとき
- (3) あひて、
- (4) おしふるに、
- (5) かく五欲に著して、

なやみをしやうず。しよよくのいんゑんをもて、⁽¹⁾ 三あく道にくだし、六しゆの中に入りんゑして、つぶさにもろくくどくをうく。しゆたいのみぎやう、⁽²⁾ 世々に常にそうちやうす。はくとく少ふくの人、⁽³⁾ しゆぐにひつばくせられ、しやくんのちうりん、もしはう、もしはむとうにいれり。此もろくの見に(依止)して、⁽⁴⁾ 六十二をぐそくせり。こもろの法にじんちやくして、⁽⁵⁾ かつくうけてすつべからず。我まんして、みづからこ

99 かに、てんごくして、心じつならず。千万おくこう

におゐて、佛のみやうじをきかず。又、正法をきかず。かくのごとき人は、どしがたし。此故に、舍利弗、我、⁽¹⁾ ためにはうべんをまうけて、もろくのじんくの道をとき、是をしめすに、ねはんをもてす。わが、⁽²⁾ ねはんをとくといへ共、是(亦)まことのめつにあらず。しよ法は、もとより此かた、つねにおのづからじやくめつ

100 のさう也。佛子、道を行じおわりて、らい世に佛に成事

をゑん。我、⁽¹⁾ はうべんのちからありて、三ぜうの法をかいじす。一さいのもろくの世尊も、みな、一ぜうの道をとき玉ふ。今、此もろくの大しゆ、皆、⁽²⁾ ぎわくをのぞくべし。諸佛は、みこと、事なる事なし。たゞ、⁽³⁾ 一にして、二ぜうなし。くわこむしゆこうの無りやうめつどの佛、⁽⁴⁾ 百千万(億)しゆにして、其かづ、はかるべからず。かくのごときの諸々の世尊も、しゆくゝのゑん・ひゆ・

101 むじゆのはうべんりきをもて、しよ法のさう

をゑんぜつし玉ひ、⁽¹⁾ 此もろくの世尊とうも、皆、一ぜうの法をといて、無りやうの衆生を化して、⁽²⁾ 佛道にいらしめたまひき。又、もろくの大しやうしゆ、一さいせけん天人・ぐんしやうるい、⁽³⁾ じん心のしよよくをしろしめして、さらに異のはうべんをもて、⁽⁴⁾ たい一きをぢよけんしたまひき。もし、しゆじやうのたくいありて、⁽⁵⁾ 諸々のくわこの佛にあひ奉りて、もし、法お

102 きいてふせし、あるひは、ちかい・んにく・しやうじん・

- (1) 惱を
- (2) もろもろの欲の
- (3) いやしきかたち
- (4) 増長し、
- (5) ひととして、
- (6) 逼迫せらる。
- (7) 具足す。(8) 虚妄
- (9) かく虚妄の法に著し、

- (1) 矜高し、
- (2) 詠曲にして、
- (3) 不実なり。
- (4) これに
- (5) われ
- (6) 諸本は妙、本の誤記か

- (1) ほとけになることえん。
- (2) 方便力、
- (3) 世尊は、
- (4) 唯一にして、
- (5) 無量の
- (6) 必ず四つ假名の乱れ
- (7) かくのごとき
- (8) 無數

- (1) 演説したまふ。
- (2) 衆生を化し、
- (3) いらしめたまふ。
- (4) 群生の類の
- (5) 所欲をしろて、
- (6) 第一義助顯したまふ
- (7) 類
- (8) あふたてまつりて、

せん・智とう、しゆく^①にふくとくをしゆせる、かくのご
ときのしよ人ら^②、みなすでに、佛道を成じ
き^③。しよ佛、めつどしおわりて、もし人、ぜんなんの
心有し、かくのごときの諸々の衆生、皆すでに
佛道を成じき^④。諸佛(滅度し)おはりて、しやりをくやうせし
もの、万おくしゆのたうを(起)て、こん・こん、およびはり・
しやことめなう・まいへ・るりしゆとをもて、しやうく^⑤
103にひろくごんじきして、もろく^⑥のたうをしや

- (1) 修せし、
- (2) (6) かくのごとき
- (3) もろものひとら
- (4) 道佛なりにき。
- (5) 滅度たまふおはりて
- (6) 佛道なりにき。
- (7) 佛道なりにき。
- (8) 滅度たまふおはりて
- (9) 琉璃珠をもて

うげうし^①、あるひは、しやくみよふをたて、^②せんだん、お
よびぢんすい・もくみつ、ならびによのざい、せんくわ・
でいどうおもてする有。もしは、くわうやの中
にして、土をつみて(佛)みよふお成じ^③、ないし童子の
たはふれに、いさごをあつめ、佛たうとせし^④。かく
のごときのしよ人ら、皆、すでに佛道をしやうじき^⑤。
もし人、佛のためのゆゑに、諸々のきやうごうをこん
104りうし、こくてうして、しゆざうをしやうせし^⑥。みな、

- (1) 莊嚴し、
- (2) 石廟をたて
- (3) あはせて
- (4) 佛廟をなし
- (5) 佛塔となせる
- (6) かくのごときをこん
- (7) 佛道なりにき。
- (8) もろもの相をせし

すでに、佛道をしやうじき^①。あるひは七ほうをもてな
し、ちうじやく・しやくひやくとう・ひやくらう、および
あん・じやく・つ・もく、およびよい、あるひはけう・
しつ・布をもてごんじきして、佛ざうをつくる^②。
かくのごときの(諸の)人ら、皆すでに、佛道をしやうじ
き^③。さいゑして、百ふくしやうごんのふつざうの
さうをなし^④、みづからもなし^⑤。もし人をしても
105せしむる、皆すでに、佛道を成じき^⑥。ないし

- (1) (10) 佛道なりにき。
- (2) つくれる、
- (3) かくのごとき
- (4) 佛道なりにき。
- (5) 佛の百福莊嚴相をつら
- (6) みづからもつくり
- (7) せしめたる、
- (8) 佛道なりにき。

童子のたはふれに、もしは草木、およびふで、ある
ひはゆびのつめおもて、ゑかいて佛ざうおなし
、かくのごときのしよ人ら、皆すでに佛道をじ
やうじき^①。たゞし、諸々の(菩)薩と化して、むりや
うしゆをどたつしたまひき^②。もし人、たうみや
う・ほうざう、およびゑぞうにおゐて、けかう・ばん
がいをもて、敬心にしてくやうじ、もし人を
106して、がくをなさしめて、つゝみおうち、かく・ぱい

- (1) 佛像を画作せる、
- (2) かくのごときを
- (3) 以下に脱文「補注9」
- (4) 佛道なりにき。
- (5) 度脱せり。(6) 画像
- (7) 画像に(8) もし
- (9) 楽をなさしめ、

おふき、せう・ちやく・きん・くご・びわ・ねう・とうはつ、
かくのごときの諸々のたえ成^①、ことく^②
もて、くやうじ、あるひはくわんぎのこゝろお
もて、かはいして、佛のとくをしやうする事、ない
し一のせうをんをもてせし、皆すでに佛道
をしやうじき^③。若、人、さんらんの人に、ないし一花を
もて、ゑぞうにくやうじ、やうやくむしゆの佛
107をみ奉りき。あるいは人有て、らいはいし、あるい

- (1) 空篋
- (2) かくのごとき
- (3) もろのたえを
- (4) 佛徳を頌し、
- (5) 小音をもてせしも、
- (6) 佛道なりにき。
- (7) ひとつのはなを
- (8) 供養せる、

は又、たゞがつしやうし、ないしひとつのてをあげ、
あるひはまた、すこしかうべをうなたれて、
是をもて、ざうにくやうぜしも、やうやくむしゆ
の佛を見奉りき^①。みづからむ上道をしやう
じき^②。ひろくむしゆのしゆをどし、むよねはんに
入玉ふ^③。た木、つきて火のめつするがごとし^④。
若、人、さんらんの心に、たうみやうのうちに入て、ひと
108たびなむ佛とせうぜば^⑤、皆、すでに佛道を

- (1) 供養せし、
- (2) みたてまつりて、
- (3) 無上道をなり、
- (4) 無常空性にあること
- (5) ひよめをとりき
- (6) 塔廟のなか
- (7) 称せし、

成じき^①。諸々のくわこの佛、げんざい、あるひはめ
つごにおゐて、もし此法をきく事有し^②。みなす
でに佛道をしやうじき^③。みらいのもろく^④の世
尊、其かつばかり有事なけん^⑤。此もろく^⑥の如
来(等)も、又ほうべんをもて、法をときたまはん。一
さいの諸々の如来、むりやうのはうべんをも
て、諸々の衆生をどたつして、佛のむろのちに入
109たまはん。もし法をきく事あらんものは、ひとり

- (1) 佛道なりにき。
- (2) もろもの衆のほけを
- (3) きくことあるは
- (4) (妙) 本の誤記か
- (5) 佛道なりにき。
- (6) 必ず四つ仮名の乱れ
- (7) 方便して
- (8) もろもの衆生を脱して
- (9) もろもの衆生を脱して

として、成佛せずといふ事なけん。しよ佛の
本せいぐはんは、われしよ行の佛道を、あまねく衆
生をして、又、おなしく此道をゑせしめんとほつ
し玉ふ^①。みらい世のしよ佛、百千おくのむしゆの
もろく^②の法もなおとき玉ふといへ共、それじつ
には一ぜうのためならん^③。しよ佛・りやうそく尊、法は
常に無性なり、ぶつしゆ、あんよりおこるゝとしろ
110しめす。此ゆへに、一ぜうをときたまはん。此法は、法位

- (1) ほとけにならず
- (2) わか
- (3) おほす。
- (4) といふとも、
- (5) 一乗のためなり。
- (6) 阿足尊は、
- (7) 佛種は

にちうして、世けんのさう、じやうぢうなり。道場におゐてしりおはりて、導師、はうべんしてきたまは

ん。天人のくやうじ奉る所のげんざい十方の佛、

其かず、ごうしやのごとくして、世けんに出現したま

へり。しゆ生をあんおんならしめんが故に、又、かくの

ごときの法をとき玉ふ。だい一のじやくめつを

しろしめして、はうべんのちからをもてのゆへに、

111 しゆの道をしめすといへども、それ、じつには

佛ぜうのため也。しゆ生のしよ行、深心のしよねん、く

わこのしよしゆのごう、よくしやう・しやうじんのちか

ら、およびしよこんのりどんおしろしめして、しゆ

のいんゑむ・ひゆ、又ごんじきをもて、おふぜるに

したがひて、はうべんしてとき玉ふ。今われ、又、か

くのごとし。衆生をあんおんせしめんがゆへに、しゆの

112 法もんおもて、佛道をのべしめす。我、ちゑのち

からをもて、しゆ生のよくしやうをしり、はうへん

して、しよ法をといて、みな、くわんぎする事を

ゑしむ。舍利弗、まさにしるべし、われ、佛眼をも

て、くわんじて六道のしゆ生をみるに、びんぐうにし

てふくゑなし。生死のけん道に入て、さうぞくして、

苦、たゑず。ふかく五よくにぢやくする事、めう此

を、あいするがごとし。とんあいをもて、みづからおほ

113 て、まうみやうにして、見る所なし。大せいの佛、お

よびだんくの法おもとめず。ふかくもろくの

じやけんに入て、苦をもて苦をすてんとほつす。

此しゆ生のための故に、しかも大悲心をおこしき。

我、はじめて、道場にざし、くわんしゆし、又、経行し

て、三七日のなかにおゐて、かくのごときの事をしゆい

しき。『わがしよとくのちゑは、みめうにして、もつ共

だい一也。しよ生のしよこん、どんにして、らくにぢやくし、

114 ちにめしいられたり。かくのごときらのたぐい

をば、いかにしてかどすべき』と。其時に、もろく

(1) 出現したまふも

(2) 衆生を安穩せん

(3) かくのごとき法

(4) 方便力を

(1) もろもろの行

(2) ふかきころ

(3) 精進力

(4) 諸根の利鈍をしりて

(5) 応に

(6) 安穩せん

(7) 宣示す。(六訓、同

(1) 歡喜することえむ

(2) 六道の衆生を觀見するに

(3) 五欲に着せること

(4) 聖のお學ぶ此品字

(5) おほひ

(6) みごころ妙本の弊か

(1) おもふ。

(2) 道場四假名の乱れ

(3) 道場に坐して

(4) 三七日のなか

(5) 類を、

(6) いかにしてか

のぼん王、および諸々の天たいしやく、ごせの四天王、

および大じぎい天、ならびによもろくの天しゆ、け

んぞく、百千万也。くぎやうし、がつしやうして、らいし

て、我にてんほうりんをしやうじき。我、則、みづから

しゆいす。『もし、たゞ、佛ぜうをほめば、しゆ生の、苦に

もつざいせる、此法をしんずる事あたはじ。法を

115 はして、しんぜらんがゆへに、三あく道におち

にや入なん』と。たづねて、くわこの佛のしよ行

のはうべんきをおもふに、『わが、今、ゑたる

所の道も、又、三ぜうをとくべし』此のしゆいなしし

時、十方の佛、皆、げんじて、梵音をもて、我をいゆし

玉ふ。『よきかな、しやかもん。だい一の導師、此無上の

法をゑ玉へ共。諸々の一さいの佛にしたがひて、しか

116 も、はうべんのちからおもち玉ふ。われらも、また、

皆、さい妙だい一の法をゑしかども、もろくのしゆ

ぢやうるいのために、ふんべつして、三ぜうをとく。少

智は小法をねがふて、みづから佛にならん事をしん

ぜず。此ゆへに、はうべんをもて、ふんべつして、しよ

くわをとく。又、三ぜうをとくといへ共、たゞ菩薩

をおしへんがため也。舍利弗、まさにしるべし、我、

しやうし、のじんしやうみめうのみこゑをきいて、よ

117 ろこびて、なむ佛とせうす。又、かくのごときのね

んおなす。『我、ちよくあくせにいでたり。しよ佛

のしよせつのごとく、我も又、ずんじゆむして行せん』

と。此ことをしゆいしおわりて、則、はらないにおも

むく。しよ佛じやくめつのさうは、ことばおもつての

ぶべからず。はうべんのちからをもてのゆへに、五び

くのためにとき、是をてんほうりんと

づく。則、ねはんのこゑ、およびあらかん・法・僧、しやへつ

の有。『くおんごうより此かた、ねはんの法をさんし

118 して、しやうじの苦、ながつくせり。』我、つねにかくの

(1) あはせて

(2) 思惟すらく、

(3) 破法不信のゆへに、

(1) いりなまし。

(2) 二ナシ

(3) つきて

(4) いまゑなるころの道をも

(5) 三乗と

(6) この思惟をなすき

(7) 無上の法をえて

(8) しよ二ナシ

(9) 方便力を

(10) 法をえたととも

(1) 衆生の類四假名の乱れ

(2) 小智

(3) ばけをせんしんぜす

(4) もろもろの果

(5) ききたまへて、

(6) 称しき。

(7) かくのごとくおもむく、

(1) 二ナシ

(2) この事

(3) 諸法の僧滅の相をは

(4) 方便力

(5) 阿羅漢法僧の

(6) 讚示す。

(7) 下に引用の「下」アリ

ごとくとき、しやりほつ、まさにしるべし、われ、佛子
とうをみ、佛道をしぐするもの、むりやう千万お
くにして、ことごとくきやうの心をもて、みな
佛所⁽³⁾にらしせるは、むかし、しよ佛にしたがひ
奉りて、はうべんのしよせつの法をきけるもの也⁽⁶⁾。
我、則、此ねんをなさく、「如来のいでたまへるゆへは、
佛系をとかがためのゆへなり。今まさしく、是、
119 其時也。しやりほつ、まさにしるべし、どんこん

小智のひと、ちやくさうけうまんのものは、此法をしん
ずる事あたはず⁽¹⁾。今、我、よろこむで、おそる、
事なし⁽²⁾。諸々の菩薩の中にして、しやうぢき
にはうべんをすて、たゞ、む上の道をとく。菩薩、
此法をき、ぎまう皆すでにのぞきつ。千二百
のらかん、ことごとく、又、まさに佛に成べし。三世の
しよ佛のせつ法のぎしきのごとく、我も今、又、か
120 くのごとくむふんべつの法をとく。しよ佛、世にこふ

しゆつし玉ふ⁽¹⁾。はるかにとをくして、ちぐする事かた
し。たとい世に出玉ふ共⁽²⁾。此法とき玉ふ事、又かた
し。むりやうしゆこうにも、此法をとく事⁽³⁾。又かたし。
よく此法をきくもの、此人、又々かたし。たとへはうとん
げの、一さい皆あひげうし、天人のけうにする所と
して、ときにいまし一度出るがごとし。法をきい
てくわんぎし、ほめて、ないし一こんをもおこせ⁽⁶⁾。
121 則、すでに一さいの三世の佛をくやうずる

になんぬ。此人、はなはだけう成事、うどんげにすぎ
たり⁽²⁾。なんぢら、うたがふことなかれ⁽³⁾。我、しよ法の王た
り。あまねく諸々の大しゆにつぐ。『たゞ、一ぜうの道を
もて、もろくの菩薩をけうけす。しやうもんの
しなし。なんぢら、舍利弗・しやうもん、および菩薩、ま
さにしるべし。此妙法は、しよ佛のひよふ也。五ぢよく
あくせには、たゞ、しよよくにげうちやくせるをも
122 て、かくのごときらの衆生は、つゐに佛道をもとめ

- (1) みるに、
- (2) 「にして」ナシ
- (3) ほとけのみもとに
- (4) 来至せり。
- (5) したかたでまゐりて
- (6) 法をきけり。
- (7) このおもひ

- (1) 信することあたはず
- (2) おそれなし。
- (3) たたし
- (4) 法をききて

- (5) かくのごとし。

- (1) 興出したまふことは
- (2) なむいふたまふとも
- (3) きくこと
- (4) 時に
- (5) いまし
- (6) 一言をもおこすは

- (1) 供養せむになりぬ
- (2) 優婆塞よりもすきたり
- (3) なんだち、
- (4) うたがふことなかれ
- (5) たたし、
- (6) なんだち、

ず。たうらいせのあく人は、佛の一ぜうをとき玉ふをき
いて、めいわくしてしんしゆせじ。法をはして、あく道
におちなん。ざんぎしやうににして、佛道を
しぐするものあらは、まさにかくのごときらの
ために、ひろく一ぜうの道をさんずべし。舍利弗、
まさにしるべし、諸佛の法、かくのごとし。万おく
はうべんをもて、よろしきにしたがひて、法
123 をとき玉ふ。それ、しゆがくせざるものは、是を

けうれうする事あたはじ⁽¹⁾。なんぢら、すでにしよ
佛の世の師のすいぎのはうべんの事をしりぬ。
又、もろくのきわく「なく」、心に大くわんぎをなして
みづからまさに、佛になるべしとしれ。」
124 妙法蓮華經第一

- (1) 志すことあんもの
- (2) はむへし。
- (3) 万億の
- (4) その

- (1) あたはず。
- (2) なんだち、
- (3) 隨宜方便の事

【補注1】 われ、すでにことごとく知見せり。かくのごとき大果報、種種の性相の義をは、
われ、をよひ十方のほとけにみ、いましよくこの事をしりたまへり。(妙一本
八二・4(八三・1))

我已悉知見 如是大果報 種種性相義 我及十方佛 及能知是事 (岩波文庫本
上七〇・8(10))

舍利弗、なんだち、まさにほとけの所説を信すへし。みこと、虚妄ならず。(妙
一本 一〇八・4(15))

【補注2】 舍利弗 汝等當信 佛之所説 言不虛妄 (岩波文庫本上 八八・6(7))
(はつしたまふがゆへ)に衆生をして佛のちけんの道にいらしめんとほつし玉ふ
がゆへなり。(月ヶ瀬本八五・8、右傍の行間に補記)

【補注3】 若る比丘 實得阿羅漢 (岩波文庫本上 一〇〇・4(5))
もし比丘ありて、実に阿羅漢をえて、(妙一本 一二〇・4(5))

【補注4】 若る比丘 實得阿羅漢 (岩波文庫本上 一〇〇・4(5))
比丘・比丘尼の、増上慢をいたけることある、優婆塞の我慢なる 優婆夷の不
信なる、(妙一本 一二二・5(6))

【補注5】 比丘比丘尼 有懷増上慢 優婆塞我慢 優婆夷不信 (岩波文庫本上 一〇〇・
15(16))
比丘比丘尼 有懷増上慢 優婆塞我慢 優婆夷不信 (岩波文庫本上 一〇〇・
15(16))

【補注6】 佛子あり。こころさよく柔軟にして、また、利根なり。無量の諸佛のみもとに
して、深妙の道を行す。(妙一本 一二七・2(4))
有佛子心淨 柔軟亦利根 無量諸佛所 而行深妙道 (岩波文庫本上 一〇四・
8(9))

【補注7】われ、かくのごときのと、来世に佛道ならんと記す。(妙一本 一二・七・5・6)

我記如是人 来世成佛道(岩波文庫本上 一〇四・11)

【補注8】深心をもて、ほとけを念し、淨戒を修持するかゆへに(妙一本 一二・七・5)

以深心念佛 修持淨戒故(岩波文庫本上 一〇四・12)

【補注9】漸々に功德をつみ、大悲心を具足して、(妙一本 一四二・4)

妙法蓮華經譬喻品 第三

其時に、舍利弗ゆやくし、くわんぎして、すなはち「起ちて」たなこ、ろを合、そんげんをせんがうして、佛に申てまうさく、「今、世尊にしたがひ奉りて此法おんをきゐて、心にゆやくをいだき、みぞう有なる事をえつ。ゆへはいかん。われ、むかし、佛にしたがひ奉りて、かくのごときの法を聞、し

126 諸々の菩薩。じゆきさぶつするを見しか共、し

- (1) 瞻仰したてまつる。
- (2) しかうして脱字
- (3) したかたでまつりて
- (4) ききたまへて、
- (5) 未嘗有ることえ。
- (6) したかたでまつりて
- (7) 菩薩の

のも、我等、此事にあつからず。はなはだ、みづから如来のむりやうのちけんをうしなへることを、せんやうしき。世尊、我、つねにひとり、せんりむじゆ下にしようして、もしは座し、もしはきやうじて、つねに、此おもひをなす。『われらも、おなじく法性に入り。いかんぞ、如来、小でうの法をもちて、さいどせられける』と。是、我らがとが也。世尊にはあらざり

127 けり。ゆへはいかん。もし我ら、しよゐんをとき

- (1) あつからずして、
- (2) 語順の相違【補注】
- (3) このおもひをなしき。
- (4) 世尊のに
- (5) 「と」ナシ

たまふを待て、あのかたら三みやく三ぼだひをしやうしゆするを、またせまししかば、かならず大ぜうをもつて、どだつする事をえてまし。しかるを、我ら、はうべんをもて、よろしきにしたがひて、とき玉ふ所をさとらすして、始て佛法を聞て、たまく、則、しんじゆし、しゆいして、せうをとりき。『我』むかしより此かた、ひめむすによも

128 すがら、つねにみづからこくしやくしき。しかるを、

- (1) 成就せまししかば、
- (2) 度脱することえまし。
- (3) しかあるを、
- (4) 取證をとりき。
- (5) ひめむす夜もすから
- (6) しかあるを、

今、佛にしたがひ奉りて、いまだきかざる所の、みぞうの法をき、て、もろくのぎげおだ

んじ、しんい、たいねんとして、心よくあんおんなる事をえつ。今日、則、しりぬ。まことに、これ、佛子也。ふつくよりしようじて、佛法のわかちをえつ。其時、舍利弗、かさねて此ぎをのべんとおもひて、げをときて申さく、

129 「われ、此法をんをき、て、みぞう成所をえつ。

こ、ろにおほきなるくわんぎをいだきて、ぎまう、みな、すでにのぞこりぬ。むかしより此かた、佛けうをかうふりて、大ぜうをうしなはざりけり。佛のみこゑは、はなはだけ有也。よく衆生のなやみをのぞき玉ふ。われ、すでにろじんする事をあたれ共、き、て、又、うなふをのぞくき

130 とにありて、もしはざし、若は経行して、つ

- (1) 大歡喜
- (2) のそこほる。
- (3) 惱(左訓、同)
- (4) 測するたとえども
- (5) 林樹下

ねに此事をしゆいし、あ、ふかくみづからせめき。『いかんぞ、しかも、みづからあざむける。』我等も又、佛子にして、おなしく、むろの法にいれ共、みらいに無上道をのべとく事あたわす。ごんじき・三十二・十力、もろくのけたつにおなじくともに、一法の申にして、しかも、此事をえす。八十しゆのめうがう・十八ぶくの法、かくのごときらのくどく、しかも、われ、みなすでに、うしなへり。われ、ひとり経行

131 れ、みなすでに、うしなへり。われ、ひとり経行

せし時、佛、大しゆにましく、て、みやうもん、十方にみちて、ひろく衆生をねうやくし玉ふを見て、みづからおもわく、『此りをうしなへり。われ、みづから、こわうする事をなせり。』我、つねに日夜におひて、つねに此ことをしゆいして、もて、世尊にとい奉らんとする。『うしなへりやせん、うしなはすや。』われ、常に世尊を見奉るに、もろくの菩薩

132 をせうさんし玉ひき。こ、をもて、日夜におひて、

- (1) 十方に遍し、
- (2) なしけり」と。
- (3) 日夜に、
- (4) 思惟しき。
- (5) おもふ。
- (6) うしなへりやせん
- (7) うしなはすやとやせん。
- (8) 日夜に、

かくのごときの事をちうりやうしき。今、佛のおんじやうをき、奉るに、よろしきにしがひて、法をときたまひけり。むろは、しぎする事かたし。

しゆをして、だうぢやうにいたらしむ。われ、もしやけん〔に〕ちやくして、もろくのほんじの師たり。世尊、我心をしらしめして、じやをぬき、ねはんをときたまふ。われ、ことくく、じやけんをのぞきて、くうほうにおゐて、せうをゑき。其時に、心にみ

づからおもひき、『めつどにいたる事をえたり』しかるを、今、則、みづからさとりぬ。『是、まことのめつどにあらざりけり。もし、佛になる事をえん時、三十二さうをぐし、天・人・やしやしゆ・りうじんとう、くきやうせん。此時にすなはち、おもふへし。ながくことくくめつして、あまりなし』と。佛、大しゆの中にして、我を『まさに、佛に成べし』とき玉ふ。かくのごときの

134 法音の聞て、ぎげ、ことくく、すでにのぞこりぬ。

はじめ、佛のしよせつをきいて、心の内におほきにおどろかうたがひき『まさに、まの、佛となりて、わがこゝろをなふらんする〔にあらす〕や』と。佛、しゆくのゑん・ひゆをもて、たくみにごんぜつし玉ふ。其こゝろやすき事、うみのごとし。われ、きゝて、ぎまうた〔んじ〕ぬ。佛のときたまはく、『くわこせの、むりやうのめつどのほとけ、はうべんの中にあんぢうして、又、みな、此法をと

135 きたまひき。けんざい・みらいの佛、そのかつ、

はかり在事なきも、又、もろくのはうべんをもて、かくのごときの法をのべとき玉ふ。今の世尊のこときも、生じ玉ひしより、および出家し、とく道し、法りむをでんじ玉ふ。又、はうべんをもて、とき玉ふ。せそんは、しつ道をとき玉ふ。はしゆんは、此事なし。こゝをもて、我、さだめてしりぬ、是、まの佛となれるにはあらず。われ、ぎまう

136 におつるがゆへに、是、まのしよいかとおもひけり。佛

(1) ききたまふれば、

(2) 梵志の師たりき。

(3) ときたまひしかは、

(1) 滅度に至事たりと、

(2) しかあるを、

(3) 実の滅度、

(4) ほけになる事えん時、

(5) 尽滅して余なし。

(6) かくのごとき

(7) 法音をきたまへて

(8) のそこほる。

(1) 所説をきたまへて、

(2) 驚疑し左訓同

(3) こゝろやすかなる

(4) 過去のもの

(5) かす四假名の乱れ

(1) かくのごとき法

(2) 演説したまふ。

(3) 転したまふまでに、

(4) 疑網に墜する

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

めうにして、しやうくの法をゑんちやうし玉ふを聞て、わが心、大きにくわんぎし、きげ、なかくすでに、つくして、じつちの中にあんぢうしぬ。われ、定て、まさに佛になりて、天・人のために、うやまわれ、無上の法りんをでんじて、もろくの菩薩をけ

うけすべし。其時に、佛、しやりほつにつげたまわく、

137 我、今、天・人・しやもん・ばらもんとうの大しゆの中ににして、とく。われ、むかし、二万おくの佛のみもとにして、無上道のためのゆへに、つねに、なんぢをげうけしき。なんぢ、又、ちやう夜に、われにしたがひて、うけまなひき。我、はうべんをもて、なんぢをいんだうせしがゆへに、わが法の中にうまれたり。舍利弗、われ、むかし、なんぢをおしへて、佛道を心ざしねがはしめき。なんぢ、今、ことくくわす

138 れて、則、みづから、すでに、めつどをえたりとおもへり。

我、今、かへりてなんぢをして、ほんくわんしよきやうの〔道を〕おくねんせしめんと、おもふが故に、もろくのしやうものために、此大ぜうの經をとき玉ふ。妙法蓮花・けうばさつ法・佛所ごねんとなづく。舍利弗、なんぢ、みらい世に、むりやうむへんふかしぎのこうをすぎて、そこばくの千万おくの佛をくやう

139 じ、正法をぶちし、菩薩のしよ行の道をぐそくし

て、まさに、佛になる事をうべし。なをば、け

(1) 演説したまふ

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) 演説したまふ

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

(1) うなんのみこゑの、ふかくとをく、はなはだ、み

しゆ生をけうけせん。舍利弗、彼佛の出たまわん時は、⁽¹⁾あくせにあらざといへ共、ほんくわんをもての故に、三ぜうの法をとかん。其こうをは、大ほうしやうごんとなづく。なんがゆへぞ、なづけて、大ほうしやうごんといふ。その國の中には、菩薩をもて、大ほうとするがゆへなり。彼もろくのぼさつ、むりやうむへんふかしぎにして、さんじゆ・ひゆもおよぶ事、あたはざる所なりらん。佛の智力にあらざんば、よく、しるものなり

- (1) 出時は
(2) ほとの智力にあらずは

けん。もし、行ぜんとおもふ時は、ほうけ、あしをうく。此もろくのぼさつは、はじめて心をおこせるにあらず。皆、久しく、とくほんをうへて、むりやう百千万おくの佛のみもとにして、きよく、ほん行をじゆし、つねに、しよ佛のせうたんし玉ふ所あらん。つねに、佛系をじゆし、大じんづうをぐし、よく、一さいのしよほうのものをしり、しつちきむぎにして、じねん、け⁽¹⁾らんごならん。かくのごとき⁽²⁾のぼさつ、其國に、みちみて

- (1) 徳の本
(2) ところたらん
(3) 大神通を具足し
(4) 諸法の門をしらん
(5) かくのごとく

らん。舍利弗、けくわう佛の命、十二小こうあらん。王子として、いまだ、佛にならざらんときおぼのぞく。其國の人みんは、命、八小こうあらん。けくわう佛如来、十二小こうを過て、けんまんばさつに、あのかたら三みやく三ばだひのきをさづけけん。もろくのびくに、つげたまわく、『此のけんまんばさつは、つぎに、まさに、佛に成べし。なをば、けそくあんきやうたゝあかど・あ⁽¹⁾らか・三みやく三佛だといわん。其佛の國土も、又々、

- (1) 充滿せむ。左訓同
(2) のく
(3) 華光如来

かくのごとくならん。』しやり弗、此けくわう佛、めつどの後、正法、世にちうする事、三十二小こう、ざうほう、世にちうせんことも、又、三十二小こうあらん。』其時に、世尊、かさねて、此ぎをのべんとおほして、げおときてのたまわく、

- (1) 住せんこと
(2) 三十二小劫あらん

「舍利弗、らい世に佛・ふちそんとならん。なをば、なづけて、けくわうといはむ。まさに、むりやうしゆを⁽¹⁾144 わたすべし。むしゆの佛をくやうじ、菩薩行・十⁽²⁾

- (3) 無量の衆
(4) 度すへし。
(5) 菩薩の行

力とうのくどくをぐそくして、無上道をせうぜん。むりやうこふをすぎおわりて、こふおは、大ほうごんとなづけ、世かいをは、りくとなづけ、しやうごんにして、けあなく、るりをもて地とし、こがねのなは⁽¹⁾をもて、その道をさかへ、七ほうざつしき(の)うへ木には、つねに、け・くわじつあらん。彼國のもろくのぼさつは、じねん、つねにけんごにして、じんつう・はらみつ、みな、⁽²⁾すでにことくぐそくし、むしゆの佛のみも

- (1) 離苦となつけむ。
(2) 金繩
(3) さかへらん。
(4) 七宝の雑色の樹

とにして、(よく)菩薩の道をがくせん。かくのごときらの大し、けくわう佛のしよけならむ。佛、王子たらん時に、國をすて、よのさかへをすて、さいまつごのしんをもて、出家して、佛道をしやうじせん。たまはん。けくわう佛のよにちうせん。いのち、十二小こうあらん。其國の人みん(衆)、じゆみやう、八小こうならん。佛のめつどの後、正法、世にちうして、三十二小こう、ひろく、も⁽¹⁾ろくの衆生をわたさん。正法、めつじんしおはりて、

- (1) 学せらん。
(2) 王子といまさん
(3) 國をすてさかへすて
(4) 佛道ならん。
(5) 華光佛の住世
(6) 八小劫あらん
(7) ほとけ滅度のち
(8) 度せん(左訓)同

ざうほう三十二小こうあらむ。しやり、ひろくるふして、天・人、あまねくくやうぜん。けくわう佛のしよい、その事、みな、かくのごとし。其りやうそくのしやうそんは、さいせうにして、りんびつなけん。かれ、則、これ、なんちがしん也。よろしく、みづからごんぎやうすべし。』其時に、四ふのしゆ、びく・くに・うばそく・うばい・天・りう・やしや・けんだつば・あしゆら・かるら・きん⁽¹⁾なら・まごらがとうの大しゆう、舍利弗のみまへに

- (1) 兩足に聖尊
(2) なんちか身なり。
(3) 四部衆
(4) 佛前に

して、あのかたら三みやく三ばだひの記をうくる(を見て)心、大きにくわんぎ、ゆやくする事、むりやう也。おのくつかつかに、身にきたる所の上のころもぬぎて、もて、佛にくやうず。しやくだいくわんるん・梵天(王)とう、むしゆの天子とともに、又、天のたえ成ころも・天のまんだらけ・まかまんだらけとうをもて、佛にくやうず。しよさんの天、こくうの中にちうして、をのづ⁽¹⁾から、ゑてんす。しよ天のぎがく、百千万しゆ、こくうの

- (1) 歡喜し
(2) 各各に(左訓)同
(3) 上衣
(4) 供養したてまつる。
(5) 供養したてまつる。
(6) 廻転す。妙一本の誤

中にして、一時にともになす。もろくの天げおふらす。しこふじて、此ことばをなさく、「佛、むかし、はらないにして、始め法りんをでんじ、今、則、又、無上さい大法りんをでんじ玉ふ」と。其時に、もろくの天子、かさねて、此ぎをのべんとおもひて、げをきてまうさく、「むかし、はらないにして、四たいほうりんをでんじ、ふんべつして、しよほう五しゆのしやうめつ149をとき玉ひき。今、又、さいめうの無上の大ほうり

- (1) ともになし
(2) しこふじて(明合の乱れ)
(3) 無上最大の法輪
(4) 四諦の法輪
(5) 諸法の

むをでんじ玉ふ。此法、はなはだ、じんめうにして、よくしんずるもの、あることすくなし。我ら、むかしより此かた、しばく、世尊のせつ法を聞奉りしが共、いまだかつて、かくのごときのしんめうの上法をば、きかざりき。せそん、此法をとき玉ふに、われら、みな、ずいきす。大智舍利弗、今、その記をうくる事をゑたり。我らも又、かくのごとく、かならず、まさに佛に150なることをゑて、一さいせけんにおゐて、さいそんに

- (1) 無上最大の法輪
(2) 深奥にして
(3) 世尊の説を
(4) ききたまへしかとも
(5) かくのごとく
(6) 記をうくることゑつ
(7) 佛になる事ゑて

して、かみある事なけん。佛道は、じきする。かたし。はうべんして、よろしきにしがひて、とき玉ふ。わがしよ有のふくこう、今世、若はくわせ、およびけん佛のくどく、ことく仏道にあかうす。其時に、舍利弗、佛にまうしてまうさく、「世尊、われ、今また、きけなし。まのあたり、佛のみまへにして、あのくたら三みやく三ぼだひの記をうくる151事をゑたり。此もろくの千二百の、心じさい

- (1) 思議すること
(2) ときたまひけり
(3) 佛前(左調、同)
(4) 記をうくることゑつ

のもの、むかし、がくちにちうせしに、佛、つねにけうけして、のたまわく、「わが法は、(よく)しやう・らう・びやう・しをはなれて、ねはんにくぎやうす」と。此がく・むがくの、人、又、をのく、みづから、がけん、および有無のけんとうを、はなれたるをもつて、ねはんをゑたりとおきかざりし所をきいて、みな、ぎわくにおちぬ。152よきかな、せそん。ねがわくは、四しゆのために、その

- (1) しがあるを、
(2) ききたまへて、

いんゑんをとき、きけおはなれしめ玉へ。其時に、佛、舍利弗につげたまわく、「われ、さきに、『しよ佛世尊のしゆくのいんゑむ・ひゆ・こんじをもて、方便して、法をとき玉ふ。みな、あのくたら三みやく三ぼだひのため也』といわずや。このもろくのしよせつ、(みな)菩薩をげせんがためのゆへなりと。しかれ共、舍利弗、今まさに、又、たといをもて、さらに此153ことわりをあかすべし。もろくの有智のもの

- (1) 法をときたまふは
(2) 諸願の相違(補注3)
(3) 所説は、
(4) 「と」ナシ
(5) しかも
(6) 譬喩(左調、同)
(7) この義

は、たといをもて、さとする事をゑてん。舍利弗、若、こく・をふ・じゆらくに、大のちやうじやあらん。その年、すいまひして、ざいほう、むりやう也。お、く、でん・たく、およびもろくのどうはく有。其家、ひろく大きにして、たゞ一の門のみあり。もろくのしゆ、おほくして、二百二百、ないし五百人、其中にじちうせり。154だうかく、くち(ふり、かき・か)くづれおち、はしらのね、くちやぶれ、うつばり・むね、かたぶきあやうし。

- (1) 譬喩(左調、同)
(2) さとする事ゑてん
(3) 大長者
(4) 財富
(5) 広大にして、

しゆさうして、ともに時に、こつねんとして、火おこり、しやたくほんせうす。長者のもろくの子、若は十、二十、あるひは三十にいたるまで、此家の中に有。ちやうじや、此大火の四めんよりおこるを見て、則、大きにきやうふして、此おもひをなさく、「我はよく、此しよせうの門より、あんにいづるをゑたりといへ共、しかも、もろくの子共、くわたくの内にして、きけにけ155うちやくして、さとらず、しらず、おどろかず、おそれ

- (1) 俱時に
(2) 歎然に、火おこりて、
(3) われ、
(4) いづることゑたり
(5) 樂著せり。

ず。火きたりて、身をせめ、くつう、おのをせむれども、こゝろにいとひ、うれへず。出んともとむる心なし。舍利弗、此ちやうじや、此おもひをなさく、「わが身、てにちから有。まさに、ゑこくをもてや、若はきゑんをもてや、家よりは是を出すべき。」又、さらにしゆいすらく、「此家は、たゞ一の門のみ有。しかも、又、けう小也。もろくの子、ようちにして、いまだ、しる所あら156ず。けしゆ(に)れんちやくせり。あるひは、まさにたらく

- (1) 諸子(左調、同)

して、火のためにやかれぬべし。われ、まさに、ためにふいのじをとくべし。此家は、すでにやく。よろしき時に、とく出して、火のために、せうがいせられしむること、なからしむべし」と。此おもひをなしおわりて、しゆいする所のごとく、つぶさにもろくの子に

つぐ。「なんだち、すみやかにいでよ」と。(父)れんみんして、よきことはをもて、ゆうゆすといへ共、しかも、諸く

157の子共、きけにげうちやくして、あへて、しんじゆ

- (1) よろしく
- (2) だりて 妙本の誤か
- (3) 訓法の相違 補注4
- (4) 引用の「と」ナシ
- (5) 諸子 (左訓、同)
- (6) 善言 左訓、同
- (7) 誘諭す

せず。おどろかず、おそれず、ついに出る心なし。又々、なにものか是、火、なにものか是、家、いか成か、しせんとするといふ事をしらず。たゞ、とうざいにはしり、たはふれて、ち、を見る事のみ也。其時に、ちやうじや、則、此思ひをななく、此家は、すでに大火のためにやかる。「我」およびもろくの子、若、時に出ずは、かならずためにやかれなん。「我」今、まさに、はうべんをまうけて、もろくの子共をして、此がいまぬかる、こ

- (1) うせんとする
- (2) ちをみるのみなり

とをえしむべし」ち、もろくの子、さきのこゝろに、をのくこのむ所有、しゆくのちんぐわん、きいのもの(に)は、こゝろ、かならずげうちやくしなんどしりて、これにつけていわく、「なんだちが、もちあそび、このむべき所は、け有にして、ゑがたし。なんち、若とらずは、後にならずうれへ、くゆる事をせん。かくのごときのいろくのやうしや・ろくしや・ごしや、今、159門のほか有。もちて、ゆげすべし。なんだち、

- (1) まぬかる事えむへ
- (2) 憂悔せん
- (3) かくのごとき
- (4) 種種の
- (5) 門外に 左訓、同
- (6) もて

此火の家にあて、よろしく、すみやかにいで来るべし。なんちがしよくにしたがひて、みな、まさになんちにあたふべし。其時に、もろくの子、ち、のいふ所のちんぐわんの物を聞に、其ねがひにかなへるがゆへに、こゝろ、おのくゆゑいして、こさうすいはし、きそつて、ともにはせはしり、あらそひて、くわたくをいでずぬ。此時に、ちやうじや、もろくの子共、あんおんにいづることをゑて、みな、四くのたうの

- (1) 火宅 左訓、同
- (2) 下に引用の「ニアリ
- (3) ちちのごときの
- (4) 競共馳走して
- (5) いづることゑて
- (6) 四衢道

中のる地に、しかもぎして、又、しやうげなきをみて、其心、たいねん(と)して、くわんぎゆやくす。時に、もろくの子共、おのく、ち、に申てまうさく、「ち、の、さきにゆるし玉ふ所の、くわんかうのぐ、ひつじの車、しかの車、うしの車、ねがわくは、時にたまひあたふべし」と。舍利弗、其時、長者、おのく諸子に、とう一つの大しやを玉ふ。其車、たかくひろくして、もろくの子のたからをもて、しやうげうし、しゆぞうして、らんしゆむ

- (1) 歡喜し踊躍す
- (2) 羊車 (左訓、同)
- (3) 鹿車 本の誤か
- (4) 牛車
- (5) その時に
- (6) 等一の
- (7) 高広にして 左訓、同
- (8) 衆宝 (左訓、同)

有。四めんにすゝをかけ、又、其上に天がいはりまうけたり。又、ちんぎのざつほうをもて、是をこんじきせり。たからのなは、けうよろくして、もろくの子のけやうをたれたり。おんゑんをかさねてしき、あかきまへ。らをあんちせり。かするに、ひやく此ふうしき、しうけつし、ぎやうだい、しゆかうにして、大き成こんりき有。ぎやうふ、びやうしやうにして、「その」ときこと、かぜの162ごとし。又、ほくじゆうお、くして、これおじえせり。

- (1) すずをかけたなり
- (2) 宝繩 (左訓、同)
- (3) 杖 左訓、あきまへ
- (4) かくるに
- (5) 白牛の膚色充潔し
- (6) 風のこともをもてす

ゆへはいかん。此大ちやうじや、ざいふ、むりやうにして、しゆくのごさうに、ことどくく、みな、じういつせり。しかも、此思ひをななく、「我、たからのもの、きわまりなし。下れつの小しやをもて、もろくの子共にあたふべからず。いま、此いとけなきわらわ、みな是、わが子也。あいするに、へんたうなし。われに、かくのごときの七ほうの大しや有。そのかつ、むりやう也。まさに、どうしんにしをのく(に)是をあたふべし。よろしく、しやべつ

- (1) 財富妙 本の誤か
- (2) 財物 (左訓、同)
- (3) 幼童 (左訓、同)
- (4) かくのごとき七宝
- (5) なす四つ仮名の乱れ
- (6) 各各 (左訓、同)

すべからず。ゆへはいかん。我、此ものを(もて)、あまねく一國に(1)あたふとも。玉ふ共、なをともしからじ。いかにいわんや、もろくの子おや。此時に、もろくの子、おのく大車にのりて、みぞう成事をゑつ。本の所まうにあらざるが、舍利弗、なんちが心におあていかん。此長じや、ひとしくもろくの子にちんほうの大車をあたふる事、むしろこまう有や、いなや。舍利弗のまうさく、「いな也、世尊。此164長じや、たゞ、もろくの子をして、火のなんをまぬ

- (1) あたふとも
- (2) 諸子 (左訓、同)
- (3) 諸子
- (4) 未算なることつ
- (5) 所望にあらず
- (6) 諸子
- (7) 舍利弗まうさく
- (8) 火難 (左訓、同)

かる、事をえしめて、其くみやうをまつたくす
共、こまうなりとするにあらず。なにをもてのゆ
へに。若、しんみやうをまつたくすれば、則、すでに

わんかうのくを、うるになりぬ。いわんや、又、はうべん
にして、彼くわたくより、しかも、是をはつさいせる
(2) 方便して、
(3) 拔済せる

をや。世尊、若、此長じや、ないし、さい小の一つの車を
あたへず共、なを、こまうならし。なにをもてのゆへ
165に。此長じや、さきに、このおもひをなさく、『我、はう

べんをもて、子をして出ることをえしめん』と。此めん
えんおもて、こまうなし。いかにいはんや、長者、みづ

から、ざいぶ、むりやう也としりて、もろくの子をねう
やくせんとおもひて、ひとしく大車をあたふるをや。』
(2) 財富妙一本の誤か

佛、舍利弗につげたまわく、『よきかなく。なんぢ

がいふ所のことし。舍利弗、如來も、又々かくのごとし。則、

一さい世けんのち、たり。もろくのふい・すいなふ・う
166けん・むみやう・あんへいにおあて、ながくつくして、よ

(2) 暗蔽

なし。しこふじて、ことくく、むりやうのちけん・力・むし
(1) しかうして兩合の亂れ

よいをしやうじゆせり。大じん力、および智多力有。方
(2) 大神通

便・ちえはらみつをぐそくせり。大じ大ひ、つねに、け
げんなく、つねにぜんじをもとめ、一さいを利やくし
たまふ。しかも、三がいの、くちふりたる、くわたくに、うれ

れたる、衆生のしやう・らう・びやう・し・う・ひ・く・なふ・
(3) うまれたる

ことはくち・あんへい・三とくの火をわたりて、けうけして、
(4) 度して(左調、同)
167あのかた三みやく三ばだいをえしめんがため也。

諸々の衆生をみれば、しやう・らう・びやう・し・う・ひ・
く・なふのために、せうしゆせらる。又、五よく(の)さいりを

もてのゆへに、しゆくのくるしみをうく。又、とんぢやく
(1) 燒煮せらる。
(2) 種種の苦

し、ついくするをもてのゆへに、げんには、もろくの
くるしみをうけ、後には、ごごく・ちくしやう・がきのくを
(3) 諸の苦

うく。若、天上にうまれ、および人間に有ては、ひんくう
ごんく・あいべつりく・おんそうあく、かくのごときら

168のしゆくの、もろくのくるしみあり。衆生、其中にもつ
(4) 諸の苦

ざいして、くわんぎし、ゆけして、さとらず、しらず、
おどろかず、おそれず、『また』いとふ事をなさず、げだつを
もとめず。此三かいのくわたくにおあて、とうざい(に)ちそう
し、大くにあふといへ共、是をもて、うれえとせず。
(1) 「是を」ナシ

舍利弗、(佛)はおみそな(は)しおわりて、則、此おもひをな
したまわく、『我、衆生のち、たり。其くなんをぬきて、
むりやうむへん(の)佛のちえのたのしみをあたへて、
(2) 佛智慧の樂

169それおして、ゆげせしむべし。』舍利弗、如來、又、

此おもひをなしたまわく、『若、我、たゞじんりき、お
(1) た、し

よび智多りきをもてし、はうべんをすて、も
ろく(の)衆生のために、如來のちけん・力・むしよい
をはめば、衆生、是をもて、とくとする事あた

わじ。ゆへはいかん。此もろく(の)衆生は、いまだ、しやう・ら

う・びやう・し・う・ひ・く・なふをまぬかれずして、しこ
(2) まぬかれず。
(3) しかうして兩合の亂れ

170ふじて、三かいの火たくのためにやる。なにによりて
かく、よく、佛のちえをさとらむ。』舍利弗、彼長じや、又、

しんじゆに、ちからありといへ共、しかも、是をもちいずし
て、たゞ、おんごんのはうべんをもて、しよし子の、くわた

くのなんをめんざいして、しこふじて後に、をのく
(1) たたし
(2) しかうして

ちんぼう(の)大車をあたふるがごとく、如來も又々、かくの
(3) かくのことし。
(4) 以下に脱文・補注5
(5) 拔済して、
(6) しかうして
(7) この言え

171に、三ぜうたる、しやうもん・ひやくし佛・(佛)せうをとき
玉ふ。しこふじて、此ことばをなしたまわく、『なん

だち、ねがひて、三がい火たくにちうする事をうるこ
となかれ。そへいのしき・しやう・かう・み・そくをむさ

ぼる事なかれ。若、とんぢやくして、あいをなさば、
(1) 集るとるとなれ

則、ために、やかれなん。なんだち、すみやかに三がい
を出て、まさに、三ぜうたる、しやうもん・ひやくしぶつ・(佛)せう

をうべし。我、今、なんぢがために、此事おほうにん
す。ついにむなしからじ。なんだち、たゞ、まさに、こ

172んしゆしやうじんすべし。』如來、此はうべんをもて、衆

生をゆしんし玉ふ。(「また」此ことをなしたまわく、「なんだち、まさにしるべし。此三ぜうの法をば、みな、是、しやうの、せうたんし玉ふ所也。ぢざいむげにして、あくする所なし。此三ぜうにせうして、むろのごん・力・かく・道・ぜんぢやう・けだつ・三まひとつをもて、みづからこらくして、則、むりやうのあんおん・けらくをうべし。舍利弗、若、衆生有て、うちにしやう有て、佛・世尊に173したがひ奉り、法を聞いてしんじゆし、おもひに

(1) この言(左調、同)
(2) この三乗の法は、
(3) 自在無礙
(四つ仮名の乱れ)
(4) 快樂をう。
(5) したかふてまつり、

しやうじんして、すみやかに、三がいはいでんとおもひて、みづからねはんをもとむる、これを、しやうもんぜうとなづく。彼もろゝの子、ひつじの車をもとむるがために、くわたくを出るがごとし。若、衆生有て、ほとけ・世尊にしたがひ奉りて、法を聞いてしんじゆし、おんこむにしやうじんして、じねんのゑをもとめ、ひとりよく、しづか成ことをねがひ、ふかくしよ法のいんゑむをしり、是をひやくし佛せうとなづく。彼もろ

(1) 諸子(左調、同)
(2) 羊車(左調、同)
(3) したかふてまつりて
(4) 因縁をしる、
(1) 諸子(左調、同)
(2) 鹿車
(3) したかふてまつりて

くの子の、しかの車をもとむるがために、火たくをいづるがごとし。若、衆生有て、佛・世尊にしたがひ奉りて、法をき、て、しんじゆし、こんしゆしやうじんして、「一」さいち・佛智・じねん智・無師智・如来のちけん・力・むしよいをもとめ、むりやうのしゆ生を、みんねむあんらくし、天・人をりやくし、一切をどたつする、是を大ぜうとなづく。菩薩、此ぜうをもとむるがゆへに、なづけ175て、まかさつとす。彼もろゝの子、うしの車を

(1) かの長者
(2) 火宅をうつることて
(3) 財富妙一本の誤か
(4) 諸子(左調、同)
(5) たまはながごとく、
(6) 一切衆生のうちまします
(7) 險道(左調、同)
(8) 衆

もとむるがために、火たくお出るがごとし。舍利弗、かの長者の、もろゝの子共、あんおむに火たくを出ることをゑて、むひの所にいたりぬるをみて、みづから、さいふうむりやう成ことを思ひて、ひとしく大車をもて、もろゝの子にたまはながごとし。如来も又々、かくのごとし。一切の衆生のちゝたり。若、むりやうおく千の衆生、佛のけうもんをもて、三がいのく、ふいのけはしき道を出て、ね176はむ(の)たのしみをうるをみそなわして、如来、その

時、則、此おもひをなしたまわく、「われに、むりやうむへのちゑ・力・むいとうの、諸佛のほうざう有。このもろゝの衆生は、皆、これ我子也。ひとしく大ぜうをあたへん。人として、ひとりめつどをうる事あらしめし。みな、是、如来のめつどをもて、これをめつどせん。」このもろゝの衆生の、三がいをまねかるゝには、ことゝくしよ佛のぜんぢやう・けだつと、こらくのくをあたふ。177みな、是、一さう一じゆにして、しやうのせうたんし玉ふ

(1) その時に、
(2) 一相一種なり。

所也。よく、しやうめうのだいの一のらくをしやうず。舍利弗、彼長じやの、はじめわ三車をもて、もろゝの子をゆいむし、しこふじて後に、たゞ大車の、はうもつをもてしやうごんし、あむおんだい一成をあたふる。しかも、彼長じや、こまうのとなきがごとく、如来も又々、かくのごとし。こまうある事なし。はじめには、三ぜうをときて、衆生をいん導し、しこうじて後に、たゞ大ぜうをもて、178是をどたつし玉ふ。なにをもてのゆへに。如来に

(1) はしめには
(2) 諸子(左調、同)
(3) しやうと開合の乱れ
(4) あたふるに、
(5) はしめは、
(6) しやうと開合の乱れ
(7) たたし

むりやうの智ゑ・力・むしよい・しよほうのさうましゝて、よく一さい衆生に、大ぜうの法おあたへたまふ。たゞし、つくして、よくうけず。舍利弗、此いんゑんをもて、まさにしるべし。しよ佛は、はうべん力をもてのゆへに、一佛ぜうにおあて、ふんべつして、三どとき玉ふ。佛、かさねて、このぎをのべんとおほして、げをときてのたまわく、179「たとへば、長じやの一の大きな家あらん。其家久し

(1) 方便力のゆ、
(2) 長者
(1) くちふりて、
(2) また頓弊し、
(3) たかくして
(4) かたふきよみ、
(5) はし
(6) 泥のぬれる
(7) 五百のひと
(8) 止せり(9) 蟻

くふりて、にわかにとんべいせり。だうじや、たかく、あやうく、はしらのねぐだけ」くち、うつはり・むね、かたぶきゆがみ、もとい・はしら、くづれやぶれ、かき・かべ・やぶれさけて、へいぬれ(る)」。あはけおち、おほへるとま、みだれおち、たる木・こまい、たがひぬけ、しゆしやう、くつくし180て、さうゑ、しうへんせり。五百人有て、其中に、しちすマセ(と)ひくろくまか(わ)し(か)す(か)き(き)い(は)す(す)うせず。し・けう・てう・しゆ・う・しやく・く・かう・くわん・へび・ふく・かつ・こくう・ゆゑん・しゆくう・百そく・

ゆ・り・けい・そ、もろくのあしきむしのともがら、けう
 わうちそす。しねうのくさき所、ふしやう、みてり。
 かうらう、しやちう、しかも、其上にあつまれる。こら
 う・やかん・そしやく・せんたう(1)し、ししをさけけつして、こ
 つにく、らうしやく也。是によりて、くんく、きそいきた
 りて、うちとる。うへつかれ、あわて、所々に、じきを
 もとむ。とうしやうしやせいし、がいさいかうはいす。
 181 其家、くふ有て、へんずるかたち、かくのごとし。

- (1) もろもろのむし
 (2) あつまれり。
 (3) 咀嚼
 (4) 齧齧して、
 (5) きほひ
 (6) 搏撮し左調うちりて
 (7) 飢羸瘠惶して、

所々に、皆、ぢみまうりやうあり。やしや・あつき、人のし
 しむらをじきたんす。どくちうのたぐひ、もろく
 のあしきとり・けだもの、ふ入せんしやうして、をの
 く、みづから、かくしまはる。やしや、きおひ来りて、
 あらそひとりて、是をはむ事、すでにあきぬれ
 は、あしきこ、ろ、いよくさかり也。とうじやうのこゑ、は
 なはだ、ふいすべし。くはんたき、土たにそんこせ
 182 有時は、地をはなる、事、一しやく二しやく。わうべ

- (1) 悪鬼
 (2) 孚乳産生して、
 (3) 悪心

むゆぎやうし、しういつきげす。いぬの二のあしを
 とりて、うちて、こゑをうしなはしむ。あしをもて、
 くびにくわへて、いぬをおどして、みづからたのしむ。又、
 もろくのおに有。其身、ながく大也。らきやう、くく
 しゆにして、つねに其中にちうせり。おほきにあし
 きこゑをはなちて、さけびよはひて、じきを
 もとむ。又、もろくのおに有。そののんど、はりのごとし。
 183 又、もろくのおにあり。かうべ、うしのかしらのごとし。有

- (1) 遊行して、
 (2) 鬼(左調、同)
 (3) 長大なり。左調同
 (4) 鬼(左調、同)
 (5) 鬼(左調、同)
 (6) 牛頭(左調、同)

時は、人のし、むらをはみ、ある時は、又、いぬをくらふ。かし
 らのかみ、よもぎのごとくにみだれて、ざむがい、(凶)けん
 なり。うゑつかれにせめられて、さけび、よばわり、
 はせはしり、やしや・がき、もろくのおしきとり・けだ
 もの、けきうして、よみにむかい、まどをうかゝみみる。
 かくのごときのもろく、のなん、くい、むりやうなり。此
 184 て、いまだ、久しからざるあいだ、後に、しやたくに、

- (1) 残害し、
 (2) 飢渴
 (3) 叫喚馳走す。
 (4) 窓牖
 (5) うかみち妙(本誤か)
 (6) かくのごき諸の難

こつねんし、火おこりぬ。四めんに一時に、其ほのを、共
 にさかり也。むね・うつばり・たる木・はしら、はためく
 こゑありて、ふるびさけ、くだけおれ、おちをちぬ。かき・
 かべ、くづれたふる。もろく(のきじんとう、こゑをあ
 げて、大きにさけぶ。てう・しゆ・しよてう・くはんたとう、
 しゆしやうじ、わふふして、みづから出る事、あたわず。
 あしきけだもの・どくのむし、あなにかくれ、びしやじ
 185 やき、又、其中にちうせり。ふくとく、うすきがゆへ

- (1) 忽然に
 (2) おちおつ。
 (3) 周章惶怖して、
 (4) 惡獸(左調同)
 (5) 毒虫(左調同)
 (6) 孔穴(左調同)

に、火のためにせめられて、ともに、あひざんがいでして、ち
 をのみ、し、むらをはむ。やかのたぐひ、あしきけだ
 もの、きおひ来りて、じきだんす。くさきけふり、ふ
 ほつにして、四めん、みちふさがれり。こくう・ゆゑん・
 どくじやのたぐひ、火のためにやかれて、あらそひ
 はしり、あなをいづ。くわんたき、したがひとりて、し
 かも、くらふ。又、もろく(のがき、かうべのうへに、火もゆ。け
 186 かつねつなふして、しゆじやうもんそす。その家

- (1) 野干のたぐひは、
 (2) 以下に脱文(補注6)
 (3) 惡獸
 (4) 左調、むかて
 (5) 左調、なめくち
 (6) あらそひはりて
 (7) したかひてとりて
 (8) しかもナシ

かくのごとく、はなはだふいすへし。どくがい・くわさい
 ありて、もろく(のなん、一つにあらず。此時に、家のある
 じ、門のほかにあつて、立て、ある人のいふをきく。『なん
 ちがもろく(の子共は、さきにゆけせしによりて、
 此家にらひ入せり。智小むちに、くわんこ、げうち
 やくせり』長じや、き、おはつて、おどろきて、火た
 くに入。まさに、よろしくきくさいして、せうがいする
 187 事、なからしむべし。もろく(の子にかうゆして、も

- (1) いゑのぬし
 (2) 門外にありて、
 (3) あるひとの言をきく
 (4) 歎息し、
 (5) 引用の「とアリ。

ろく(のけんなんをとく。『あしきおに・どくむし
 ありて、さい火、まんゑむ也。もろく(のくるしむ、し
 たいにさうぞくして、たえず。どくじや・くわん・ぶ、
 およびもろく(のやしや・くわんだき・やかむ・こ・
 く・てう・しゆ・し・けう・ひやくそくのたぐひ、けかつ、な
 ふきうして、はなはだ、ふいすべし。是、くなんの所也。
 いわんや、又、大火をや。』もろく(の子、しる事なけれ
 188 ば、ち、のおしへをきくといへ共、なをけうちやく

- (1) 惡鬼
 (2) 毒虫(左調、どくのむし)
 (3) もろもろの苦
 (4) 狗(左調いぬ)
 (5) はう妙(本の誤か)
 (6) 諸子(左調同)

して、きけすることやまず。此時に、⁽¹⁾長じや、しかも、此思ひをなさく、『⁽²⁾もうくの子、かくのごとく、われ、しうなふをます。今、此しやたくは、一つにして、⁽³⁾たのしむべきことなし。しかあるを、もうくの子共、⁽⁴⁾たんめむきけして、われがおしゑをうけず。まさに、火のため⁽⁵⁾にがいせられん』と。則、しゆいして、もうくのはうべんをまうけて、もうくの子共につぐ。『われに、しゆく⁽⁶⁾のちんくわんのぐ、たえなるたからのよき車有。⁽⁷⁾』

- (1) 此の時、
(2) 諸子(左調、同)
(3) わか愁惱をます。
(4) ひとつとして
(5) 耽面嬉戯す。
(6) おしゑをうけずして
(7) 害せられんとす。
(8) 妙宝の好車左調同

やう車・ろく車・大⁽¹⁾この車、今、門⁽²⁾のほかにあり。なんだち、い⁽³⁾で、きたれ。我、なんちがために、此車をさうさ⁽⁴⁾せり。心のねがわん所にした⁽⁵⁾がひて、もて、ゆげすへし。『⁽⁶⁾もうくの子、かくのごく、もうくの子の⁽⁷⁾とくをきひて、則時に、はしりきおひて、ちそうして、しかも、いづ⁽⁸⁾くうち⁽⁹⁾にいたりて、もうく⁽¹⁰⁾のくなんのはなれぬ。長じや、子の、火たく⁽¹¹⁾を出す事を、四つのちまたに⁽¹²⁾ちうして、し、のぎに⁽¹³⁾させるをみて、みづから、よろ

- (1) 鹿車(2) 門外
(3) いてきたれ。
(4) 諸子(左調、同)
(5) 「しかも」ナシ
(6) 馳走していて
(7) 諸の善妙(本の誤か)
(8) 善妙をはなれぬ(善)
(9) 四衛に
(10) 諸子
(11) まめかることとせしめつ。
(12) 諸子
(13) 諸子

こびていわく、『我、今、⁽¹⁾けらく也。此もうくの子共、しやういくする事、はなはだ⁽²⁾かたし。ぐせうむちにして、⁽³⁾けんたく⁽⁴⁾に入り、⁽⁵⁾もうく⁽⁶⁾のどくのむしおほく、⁽⁷⁾きみ、おそるべし。大きな火、たけきほ⁽⁸⁾のを、四めん⁽⁹⁾に、ともに⁽¹⁰⁾おこれり。しかも、⁽¹¹⁾もうく⁽¹²⁾の子、とんけう⁽¹³⁾(嬉戯)せり。われ、すでに⁽¹⁴⁾是をすくひて、なん⁽¹⁵⁾のまぬかる、事おあしめん。この⁽¹⁶⁾ゆへに、しよ人、われいま、⁽¹⁷⁾けらく也。其時に、もうく⁽¹⁸⁾の⁽¹⁹⁾191子、ち、のあんざせるをしりて、みな、ち、のみもと

- (1) いれり。
(2) 毒虫(左調、同)
(3) しかあるを、
(4) 難を(連声)
(5) まめかることとせしめつ。
(6) 諸子
(7) 諸子
(8) 諸子
(9) 諸子
(10) 諸子
(11) 諸子
(12) 諸子
(13) 諸子
(14) 諸子
(15) 諸子
(16) 諸子
(17) 諸子
(18) 諸子
(19) 諸子

にまうで、ち、に申てまうさく、『⁽¹⁾ねがわくは、我らに三⁽²⁾しゆのほうしやを玉ふべし。』さきにゆるし玉ひつる⁽³⁾所のごときは、しよ子、い⁽⁴⁾できたれ、まさに三つの車⁽⁵⁾をもて、なんちがしよよくにしたがふべしと。今、ま⁽⁶⁾さに、是をとく也。ただし、⁽⁷⁾きうよする事をたれ玉へ。『⁽⁸⁾長じや、大きにとみて、こさう、しゆた也。(金・銀・瑠璃)しやこ・めなふ⁽⁹⁾有。もうくのたからをもて、もうく⁽¹⁰⁾の大しやをつく⁽¹¹⁾れり。しやうけう、⁽¹²⁾ごんじきせり。しゆさうして、らんし⁽¹³⁾

- (1) 宝車(2) 門外
(3) いてきたれ。
(4) 諸子(左調、同)
(5) 「しかも」ナシ
(6) 馳走していて
(7) 諸の善妙(本の誤か)
(8) 善妙をはなれぬ(善)
(9) 四衛に
(10) 諸子
(11) まめかることとせしめつ。
(12) 諸子
(13) 諸子

ゆむ有。四めん⁽¹⁾に、すゑ⁽²⁾をかけたなり。こんせう、けうらく⁽³⁾せり。じんしゆのらまうを、其上にはりほどせり。こがねの花の⁽⁴⁾らまうのふさ、所⁽⁵⁾にたれくたせり。しゆさいさつ⁽⁶⁾しき、しゆさういねふせり。にうなんのそ⁽⁷⁾うくわう、これを(以て)いんにくとせり。上めうさいてうの、あた⁽⁸⁾ひ、千おくにして、せんびやくしやうけつなるをもて、其⁽⁹⁾上におほへり。大びやくこ有。ひしやう、た力にして、き

- (1) 金華(左調、同)
(2) 衆縁維飾し、
(3) 備直(左調、同)
(4) 宝車(左調、同)
(5) 諸子(左調、同)
(6) 歡喜踊躍して
(7) 宝車(左調、同)
(8) つけたまはく
(9) かくのごとし。

やうたい、しゆかう也。是をもつて、⁽¹⁾たからのくるまを⁽²⁾かけたなり。もうく⁽³⁾のひんしゆお、くして、これを⁽⁴⁾じゑせり。此たえ成車をもて、ひとしくもうく⁽⁵⁾の子にたまふ。もうく⁽⁶⁾の子、此時に、くわんぎゆやく⁽⁷⁾し。此たからの車にのりて、四方にあそび、きけしけ⁽⁸⁾らくして、じぎいむげならんがことし。舍利弗につぐ。『われ、又、かくのごとき。衆生⁽⁹⁾の中のそん也。せけん⁽¹⁰⁾のち、なり。一さい衆生は、みな、これを、わが子也。ふかく世の⁽¹¹⁾194たのしみにちやくして、ゑしん有事なし。三がい

- (1) 苦
(2) 充滿して(左調、同)
(3) 憂患あり。
(4) 閑居し
(5) わか有なり。
(6) 衆聖
(7) 衆聖
(8) 衆聖
(9) 衆聖
(10) 衆聖
(11) 衆聖

やすき事なし。なを、火たくのごとし。もうく⁽¹⁾のくるし⁽²⁾み、みちく⁽³⁾て、はなはだふいすべし。つねに、しやう・らう・びやう・しのうれ有。かくのごとき⁽⁴⁾らの火、じんとして、やまず。如來は、すでに⁽⁵⁾三がいの火たくおはなれて、じやくねんとして、し⁽⁶⁾づかにこし。りんやに、あんしよし玉へり。今、此、三がい⁽⁷⁾は、みな是、わが有。其中の衆生はことごとくこれ、⁽⁸⁾195我子也。しかも、(いま)此所は、もうく⁽⁹⁾のうれへと、なんのみ

- (1) 思難おほし。
(2) 救護す。
(3) 教詔す
(4) 欲染におきて
(5) 三界の苦
(6) 出世間の道

おほし。たゞ、われ、一人のよくすくひ、まほるを⁽¹⁾なす。又、おしゑをうくるといへ共、しかも、しんじゆせ⁽²⁾ず。もうく⁽³⁾のよくぜんの思ひて、とんちやくふかき⁽⁴⁾がゆゑに、こ、をもて、はうべんして、ために、三ぜ⁽⁵⁾うをとく、もうく⁽⁶⁾の衆生をして、三界のくる⁽⁷⁾しみをしらしめ、しゆつせけん道を、かいしゑんぜ⁽⁸⁾つす。此もうく⁽⁹⁾の子共、若、(心)けつちやうしぬれば、⁽¹⁰⁾196三みやう、および六じんづうおぐそくす。あるひは、ゑん

- (1) 思難おほし。
(2) 救護す。
(3) 教詔す
(4) 欲染におきて
(5) 三界の苦
(6) 出世間の道

がく、ふたひの菩薩をう。なんぢ、舍利弗、我、衆生のために、此たとへをもて、一佛ぜうをとく。なんだち、もし、よく此ことばをしんじゆせば、一さい、みな、まさに、佛道なることをうべし。此のり物は、みめうにして、しやうふ、大一なり。もろくのせけんにおゐて、上ある事なしとす。佛のゑつかし玉ふ所なり。一さい衆生のせうたんし、くやうじ、らいはいすべき所なり。むりやうおく千のもろくの

しつれは、ゑしする所なし。もろくのくるしみめつじんするを、たい三のたいとなづく。めつたいのためのゆへに、道をしゆぎやうす。もろくのくはくをはなるを、げだつとなづく。此人、なにおゐてか、しかも、げだつをうる。たゞ、こまうをはなる、をなづけて、げだつす。それ、じつには、いまだ一さいのげだつをゑず。佛、此人は、いまだ、じつにめつどせずとき玉ふ。此人は、いまだ、無上道を

力・げだつ・せんぢやう・智ゑ、および佛のよのほう有かくのごときものり物をゑしめて、もろくの子共をして、日夜こつしゆに、つねに、ゆげすることおゑしむ。もろくの菩薩、およびしやうもんじゆ、此たからの車にせうして、ちきに道場にいたるへし。此いんえんをもて、十方あきらかにもとむる、さらに、よせうなし。佛のほうべんをばのぞく。舍利弗につげたまわく、『なんぢ、もろくの人とは、みな、

ゑざるがゆへに、わがこゝろにも、めつどにいたらしめたりとおもわす。われ、法王たり。法において、ほしまき、也。衆生をあんおむにせんとして、ことさらに、世にけんぜり。なんぢ、舍利弗、わが此のり物をして、せけんをりやくせんとおもふがゆへに、とく。しよゆのほうに有て、みだりにせんでんする事なかれ。若、きくことあらんものは、ずいきし、ちやうしゆせん。まさにしるべし、此人は、あひはつち也。若、此經〔法〕をしんじゆする事あらんも

是、我子也。われ、則是、ち、也。なんだち、るいこう、もろくのくるしみにやかる。われ、みな、さいはつして、三がいをいたさしむ。我、さきに、なんだち、めつとしぬと〔説く〕いへ共、たゞ、いきしにをつくせり。しかも、じつには、め(4)たなし。つせず。今、なすべき所は、たゞ、佛のちゑ也。若、菩薩あらば、此衆の中に、〔よく〕心お一つにして、しよ佛のじつ法をきけ。しよ佛・世尊は、ほうべんをもてし

のは、此人は、むかし、くわこの佛をみ奉りて、くきやうじ又、此法をきける也。若、人、よくなんぢが、しよせつを、しんずる事あらば、則、わが身お、又、なんぢおよびびく僧、ならびに、もろくの菩薩を見とす。此法花經をば、じんちのためにとく。せんしきは、是をきいて、めいわくして、さとらず。一さいのしやうもん、およびひやくし佛は、此經の中におゐて、ちからおよびざる所なり。なんぢ、舍利弗すら、なを、此經におゐて、しんのもて、い

若、〔人〕小智して、ふかくあいよくにちやくせる、是らがためのゆへに、くたいをとく。衆生、心よろこびて、みぞうう成ことをう。佛、くたいをとく玉ふ。しんじつにして、こと成ことなし。若、衆生ありて、くのほんをしらず、ふかく、くるしみのゐんにちやくして、しばらくも、する事あたはざる、これらがためのゆへに、ほうべんして、道をとき玉ふ。もろくのくるしみの、しよべんは、とんよくをほんとす。もし、とんよくをめつ

る事をゑたり。いはんや、よのしやうもんをや。其よのしやうもんは、佛のみことをしんずるゆへに、此經に、ずいじゆむす。おのれがちぶんにあらず。又、舍利弗、けうまんけたひにして、かげんのけするものには、此經をとく事なかれ。ほんぶ、ぜんしきにして、ふかく五よくにちやくせるは、聞共、さとする事あたはじ。又、ためにとく事なかれ。若、人、しんぜすして、此經をそしりはうぜは、則、一さいせけん、佛のたねをたつ。あるひは、又、ひんしゆくして、うた

(1) 譬喩(左調、同)

(2) 佛道なることうべし

(3) この乗は、

(1) かくのごとき乗

(2) 宝乗、左調、同

(3) 十方に

(4) もとむるに、

(5) 方便をはおく

(6) 諸人等

(1) 累劫に、

(2) 苦

(3) 三界をいてしむ

(4) たなし

(5) 生死をつくせり

(6) たなし

(1) 小智にして、

(2) 語順の相違補注

(3) 苦

(4) 諸苦の

(1) 諸苦

(2) 解脱をうとなづく

(3) 解脱とす

(1) えざるがゆへなり

(2) 自在なり

(3) 安穩せんとして

(4) この法印は、

(5) おもふためのゆへに

(6) きくことあらんもの

(1) 信することあらんは

(2) われをみ

(3) あはせて

(4) 深智のためにとけ

(5) さとらし

(6) この經におきては

(7) 信をもて(連声)

(1) 信をもてゐることたり

(2) 佛語を

(3) 信するがゆへに

(4) 我見を(連声)

(5) 計するものに

(6) 毀謗せは

(7) 一聞ナシ

(8) 佛種を断してん

がひまどひをいたかん。なんぢ、まさに此人のつみのむくひをとかんを聞べし。若は佛のざい世にもあれ、もしは、めつどの後にもあれ、それ、かくのごときの經でんをひはうずる事あらん、經をどくじゆしききたもちする事あらんものを見て、かるしめいやし、にくみそねみてけつごんのいだかん、此人のつみのむくひを、なんぢ、今又、きけ、其いのちおわりて、あびごくにいらん。一こうをぐそくして、こうつきなば、さらにうまれん。かくのごとく

- (1) 疑惑
- (2) 罪報(左訓、同)
- (3) 在世にまれ
- (4) 滅度のちにまれ
- (5) かくのごとき經典
- (6) 書持する左訓、同
- (7) 輕賤にして左訓、同
- (8) 結恨を(蓮声)
- (9) 命終して左訓、同

てんぐとして、むしゆこうにいたらん。地ごくよりいで、は、まさに、ちくしやうにをべし。若いぬ・やかととしては、其かたち、こつしゆし、つ、しみ、くろくしらはたけ有て、人にふれなやまされん。又々、人のために、にくみいやしまれん。常に、けかつにたしなんで、ほねにく、かれづきたらん。いきては、そどくをうけ、ししては、くわしやくをかうふらん。佛のたねをたつがゆへに、此つみのむくひおうけん。若は、かく共だと成あるひは、ろの中にむまれて、

- (1) 梨壁(左訓、同)
- (2) 疥・癬
- (3) 触壁せられん左訓、同
- (4) 骨肉左訓はなし
- (5) 枯渴せん
- (6) 佛を断する左訓、同
- (7) 罪報(左訓、同)
- (8) 駢脱となり

身につねにおもき〔物〕をおひて、もろくのつゑ・しもつをくわえられむ。たゞし、水と草とをのみおもひては、よはしる所なけん。此經をはうずるがゆへに、つみをうくる事、かくのごとし。あるひは、やかと成て、じゆらくにらひ入する事あらば、しんだい、け・らひありて、又、一ツの目、なからん。もろくの童子のために、ちやうちやくせられ、もろくのくつうをうけ、ある時は、しする事おいたさん。これにおゐて、しする事おわりて、さらにやまかゞち

- (1) 杖(極左訓、同)
- (2) 水草をのみおもひて
- (3) つみをうくること
- (4) 「あるひは」ナシ
- (5) 身体に
- (6) ひとつのめなけん
- (7) 打擲せられて
- (8) ここに、

の身をうけん。そのかたち、ながく大きにして、ゑんでんはらばいゆき。もろくのこむしのために、すひくうはれて、ちう夜にくるしみおうけて、やすみやすまる事、あることなけん。此經をはうずるがゆへに、つみをうくる事、かくのごとし。もし人と成事をゑては、しよこむ、あんどむにして、たけひきく、みにく、てなへ、あしなへ、目しい、みしい、せなかくせならん。い、とかんとする所あらば、人、しんしゆ

- (1) 嬌身をうけん
- (2) 以下に下文(補注)
- (3) 宛転腹行し
- (4) すいはまれん
- (5) 苦
- (6) 休息すること
- (7) 人となること
- (8) 挫陋
- (9) 變・聲・言・聲・背・軀
- (10) 言説するところあらは

せし。口のいき、つねにくさくして、きみにしやくせられむ。びんぐうげせんにして、人のためにつかわれん。やまひお、かれやせて、ゑこする所なく、人にむすびつくといへ共、人、心におかす。若、うる所あらば、つゐて、又、わすれうしなふ事をしなむ。若、いたうをしゆし、はうにしたがひて、やまひをぢせは、さらにたのやまひをまして、有時は、又、しすることをいたさん。若、みづからやまひあらば、すくひつ

- (1) 尊れたる四候の亂
- (2) 多病
- (3) よりたのむ所なけん
- (4) 親附すといふとも
- (5) ころにおかし
- (6) 忘失しな
- (7) 医道を修して
- (8) 方に順して

くろはんとするに、人、くれうする事なからん。たとひらうやくをぶくす共、しかも、そうきやくせん。若、たのほんぎやくし、せうこうせつたう、かくのごときらのつみ、よこさまにそのつみにかゝらん。かくのごときざい人は、ながく佛、しゆじやうの王のせつ法けうけし玉ふをみづ。かくのごときざい人は、つねになんしよにうまれ、わう・れう・しんらんして、ながく法をきかじ。

- (1) 救療するに人なけむ
- (2) 抄劫竊盜せらむ
- (3) みたてまつらし
- (4) かくのごとき罪人
- (5) 心乱にして

て、則、み、しい、おしにして、しよこんぶぐならん。つねに、地ごくにしする事、をんくわむにあそぶがごとく、よのあく道に有事、おのがしやたくのごとくならん。たろ・ちよ・く、是、其ゆく所ならむ。此經をはほうせんゆへに、つみをうくること、かくのごとし。若、人と成事をゑては、れう・まん・おん・はにして、びんぐう・しすい、是をして、みづからかさりとせん。すいしゆ・かんせう・け・らい・おぞ、かくのごときらのやまひ

- (1) うまれては、
- (2) 聲(極左訓、同)
- (3) あそぶごとくせん
- (4) 舍宅のごくせん
- (5) 行樂せられん左訓、同
- (6) この經を
- (7) つみをえんこと
- (8) ひとなること
- (9) 聲・言・聲・背・軀
- (10) 莊嚴せん
- (11) 難道

是をもて、ころもせん。身、つねにくさき所有て、あかづきけがれ、ふ浄ならん。ふかくかげんにちやくして、しんい、そうやくせん。いんよく、ししやうにして、ぎんししゅうをゑらはじ。此經をはうずるがゆへに、つみをうる事、かくのごとし。舍利弗につけたまわく、「此經をはうぜんもの、もし、そのつみをとかに、こうをきはむともつきじ。此いんえんをもて、我、ことさらに212なんぢにかたる。むちの人のの中にして、此經をとく

- (1) 衣服とせん
- (2) くさきところにして
- (3) 垢穢(左訓、同)
- (4) 願患に
- (5) 勝せんかゆへに
- (6) つみをへんこと
- (7) つみをとかんこと

事なかれ。若、りこんにして、ちゑみやうれうに、たもんがうしきにして、佛道をもとむることあら

んもの、かくのごときの人に「すなはち」ためにとくべし。若、人、む(1) かくのごとくのかし、おく百千の佛をみ奉りて、もろく(2)のぜんぼんを「殖ゑ」ふかき心、けんごならん、かくのごときの人、則、ためにとくべし。若、人、しやうじんして、つねに、じしんをじゆし、しんみやうをおしまざらん、則、ためにとくべし。

213 若、人、くきやうして、ことなる心有事なく、もろ

(2) 異心(左訓同)

く(3)のぼんぐをはなれて、ひとり、山ざとにしよせん、かくのごときの人に、則、ためにとくべし。又、舍利弗、若、人有て、あくちしきおすて、善友にしんごんすることをもみん、かくのごときの人に、則、ためにとくべし。若、佛のみこ、ぢかいしやうけつ成事、きよくして、みやうじゆのごとくにして、大ぜう「經」をもとむるをみん、かくのごときの人に、「いまし」ためにとくべし。若、人、いかりなく、しつじきにうなんにして、つねに、一さいをあわれ

(1) 山沢に処せらん
(2) いまし
(3) 善友に親近するをみん
(4) いまし
(5) 佛子(左訓同)
(6) きよ明珠のごとくして
(7) 質直(四)仮名の乱れ

214 み、しよ佛をくぎやうせん、かくのごときの人に、則、ために、とくべし。又、佛のみこあつて、大しゆの中にしてしやうく(4)のころをもて、しゆく(5)のいんゑん・ひゆごんじ有て、せつ法する事むげならん。かくのごときの人に、則、ために、とくべし。若、びくありて、一さい「智」のために、四はうに法をもとめて、がつしやうし、いたゞきにうけ、たゞし、ねがひて大ぜう經でんのみ、じうぢし

(1) いまし
(2) 佛子ありて(左訓同)
(3) 譬喩の言辞をもて
(4) いまし
(5) 頂受せん
(6) 大乘經典をのみ
(7) なし(妙一本の誤りか)
(8) 餘經の一偈をも

215 の人に、則、ために、とくべし。人の、心をいだして佛のしやりをもとむることく、かくのごとく、經をもとめゑおはりて、いたゞきにうけ、其人、又、よの經を心ざし

(1) いまし
(2) 佛舍利
(3) 頂受せん
(4) 餘經
(5) 外道の典籍を
(6) いまし
(7) もとむるものを
(8) かくのごときらひと

さに、ために、めうほけきやうをとくべし。』

妙法華經信解品 第四

其時に、ゑみやう・しゆほだひ・まかせんゑん・まかしやう・まかもくけんれむ、仏にしたがひ奉りて、きける所のみぞうの法と、世尊の舍利弗にあのくたら三みやく三ぼだひの記をさづけ玉ふに、け有の心をおこして、くわんぎゆやくす。則、座より立て、ゑぶくと、のへ、ひとへにみぎのかたをあら

217 て、ゑぶくと、のへ、ひとへにみぎのかたをあら

【補注1】 はなはたみつから感傷しき、如來の無量の知見をうしなへることを。(妙一本 一七二・5-6)

【補注2】 この大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念となつくるをとく。(妙一本 一八九・1)

【補注3】 われ、さきにいはすや、『諸佛世尊の種種の因縁・譬喩の言辞をもて、方便して、法をときたまふは、みな、阿耨多羅三藐三菩提のため也』と。(妙一本 二〇六・6-二〇七・3)

【補注4】 火の燒害する所たらしむる事なからしむへし。(妙一本 二二二・3-4)

【補注5】 たた智慧の方便をもて、三界の(妙一本 二三〇・6-二三一・1)

【補注6】 ならびにすでに、さきに死す。諸の大(妙一本 二五〇・1-2)

【補注7】 ほとけ、苦諦は、眞實にして、ことなることなしたまふ。(妙一本 二六八・1)

【補注8】 五百由旬ならん。驢・驘・無足にして、(妙一本 二七八・1)